
魔王と勇者のタクティクス

kamome23

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と勇者のタクティクス

【Nコード】

N7366X

【作者名】

kamome23

【あらすじ】

本が読むのが大好きな青年がいた。

そんな青年が突如穴に落ちた。

そこには、薄気味悪い塔には似合わない一人の少女がいた。

そして突然「私たち……魔王軍を救ってください」といわれ、

そして青年は返事をして……

勇者の役を買って出た青年と魔王の娘が作り出す。

とても壮大な戦略とは……！？

第一話 「てか…魔王の娘が勇者を召喚しちゃまずいだろー!」

俺の名前は、りょうは両羽 たくみ巧という。

学校行きながらも本を読み。

帰って来ても本を読むそんな生活を送っている。

ちなみに愛読書は「孫子の兵法」だ。

そんな読書好きでさらに戦略本や兵法書などをこよなく愛す。

俺は、時々生まれてきた時代を間違えてんじゃないかと思うときもある。

そんな俺は、今日も孫子を読みながら、学校からの帰り道を歩いていた。

「兵とは国の大事なりつてね、ああ一度でもいいからこんな時代に行って兵隊を使いたいな」

そんなことを考えて歩いていたため目の前に大きな穴があるのも気づかなかった。

「わあ~~~~」

そのまま俺は落ちて行った。

時は少し迫のぼり、

「えーとまずは、河童の涙に…」

薄気味悪い塔には似合わない水色の髪の少女がいた。

「えーと次は…竜の糞……うわくさ！」

周りには誰もいなくてただ少女が必死に何かの準備をしていた。

「あとは、この黄金をつと、これで勇者を呼び出せる。」

その少女は目が輝いていた。

彼女の名前はエリス。

なんと魔王の娘。

「うんしょ、うんしょつとあと少しで完成する。魔法陣で勇者を呼び出して救ってもらわないと……」

エリスは、必死に混ぜて

「できた！」

ついにできたのだった。

それを周りに流し込んだ。

「よし完成した！」

周りには、紫色の魔法陣が描かれている。

「今ここに召喚の儀式を開始す。勇者を現世界へと呼びたまえ。」

上に大きな穴が開いた。

「わあ~~~~」

突然大きな声にびっくりはしたが、一人の男が落ちてきた。

「この人が勇者様……」

「いてて、なんだここは??」

周りを見渡すと、薄気味悪い石でできた部屋の中にいた。

「あなたは勇者様なのですか??」

可愛らしい少女が手を握ってくる。

「はあっ勇者!? 誰が!？」

タクミは、状況が呑み込めず。ただ突っ立っている。

「あなたがです」

「…俺が!!」

「そうです。」

「なんで??」

タクミは、いきなり勇者と言われても何のことかよくわかっていない。

「勇者を呼び出す儀式を行ったのです。」

「そうなのか」

エリスは、泣きそうな顔をしながら言った。

「私たち……魔王軍を救ってください」

「はあ~~~~」

その時タクミは、急に魔王軍を助けてっと言われて困惑して

「魔王軍を救う……?」

「はい、そうです。」

「え〜と何で?」

「私のお父様の魔王が、神族の裏切り行為にあい。死んでしまいました。そして今私が魔王の代理をやっています。」

「お前、魔王の娘なの!?!??」

タクミは、目の前のかわいらしい少女が魔王の娘なんて信じられなかった。

「はい、それで、そのために私たちは、最後の希望を託して勇者様をここに召喚したのです。」

「てか…魔王の娘が勇者を召喚しちゃうぞいだろ!!」

「確かに……」

顎に手を添えて納得したような顔になる。

「いまごろかよ……」

タクミはこのかわいらしい魔王様に呆れていた。

「しかし!そんなだけピンチなんです今は!!」

「どれくらいやばいんだ!？」

「魔王軍は、分散してしまい今私のもとにいるのは、たったの5千です。」

涙ぐんだ目で行ってくる。

「5千でもすごいな、もともとどれくらいいたんだ!？」

「100万です」

「はあ!100万!!どれだけ減っているんだよ!!」
100万という数字を言われてタクミは、腰を抜かす。

「ほめたり、怒ったりどっちかにしてください」

「いや、だって……なっ!」

「なに憐れんだ目で見てるんですか!」

「仕方ないだろうこんなこと聞いたんだから。」

エリスがタクミに詰め寄り

「それで助けてくれるんですか??」

「それは置いといてだ。もし俺が帰りたいと言ったら返してくれるのか??」

「それはちょっと……召喚はできたのですが、戻すのは……」
下を向いて返事をする。

「やっぱりな」

タクミはため息をついた。

「このまま、ここにいるしかないんだから協力してやろう!」
ものすごい喜んだ顔で

「本当ですか!?!」

「ああ」

「やったー!!これで百人力です」

手を挙げてバンザイのポーズを何回もしている。

「いや……ちょっと待て……俺は力なんて強くないし武術なんて少しか
じったことがある程度だぞ」

自分の手を組んで広げる動きをして

「えっ……じゃあ、一撃必殺技とか、半径5キロメートルを焼き尽
くせる魔法とかは?」

「おいおい、どんだけ勇者に夢見ているんだよ……」

「本当ですか!?!」

「本当だ。俺は腕っぷしは弱い!!ただし作戦を考えるのは得意だ
ぞ」

「そうですか……しかし、ここで勇者を復活できたといわないと士
気にも影響が出ますし……」

エリスが目をうるうるさせてきたのに負けた巧は

「わかった。わかったよ、勇者の役やってやるよ!!」

「嬉しいです!!」

エリス踊っている。

「まあそんなに喜ぶなよ期待できるほど強くないんだから…」

「それでもいいです!!」

タクミは、何かを思い出して物ふけな顔をする。

「まあいいけど、置いてきた妹が心配だな」

「妹さんがいるんですか？」

「ああ、俺とは正反対の感じで、腕っぷしが強くて戦闘になったら真っ先に突っ込んでいくようなやつなんだが…いれば楽なんだがな」
「…」

タクミは四大家族で武道家の父親にアクション女優の母親から生まれてきた。

なんでこんな親から俺が生まれてきたのか不思議で仕方ないとタクミは思っている。

「召喚では、呼びませんし仕方ありませんよ」

「私の名前は、エリスです。」

「俺の名前は、タクミだ。よろしくな」

「よろしくお願いします。」

ここで初めて自己紹介をした。

「そうだな、まあいいや。それより目標は??」

「目標ですか??」

「そうだ。何事の居ても目標があったほうがいい」

エリスは、考えて

「それなら、静かで安全な場所を求めるっていうのはどうですか？」
「？」

「はあ…そんな甘いこと言わずにもっと大きな目標もてよ!!!たとえばこの世界を奪ってやるとか」

「そんなのいやですよ!」

よっぽど嫌だったのか、語気が強くなる。

「つべこべ言わずにもう決定した。よし目標は…」

タクミは、エリスのことを少しだけ考えて

『世界をぶんどって静かな世界にさせる!!』

そうして、魔王と勇者が手を組んだ。

第二話 「全員、川に飛び込め ！！」

「世界をぶんどって静かな世界にさせるってなんですか！！」
エリナがとても怒ったような顔をしている。

「いやーだって、エリス言っただじゃないか静かな場所を求めているんだろ」

飛んだり跳ねたりして髪を上下させながら

「そうですけど、それと世界をとるは関係ありません。」

「いや、手っ取り早い方法だ！！」

タクミは押し切る。

「どこかですが！！もういいです」
脹ふくれた顔になってしまった。

「そんな事よりエリス今の魔王軍の状況を教えてくれ」

「そんなん聞いてどうするんですかー」

まだすねている。

「世界を取らないといけないからな！」

さげすんだ目で

「まだそんなこと言っているんですか？今は神族によって統治させられていて、それを人族が勝手に魔族を追い立てているんですから」
エリスの言葉や視線を無視し

「なるほどな！敵は神族かー！それなら人族を仲間にした方が手っ取り早いな！」

「何勝手に話を進めているんですか！！」

「よし、これで倒す相手は、神族からだな。」

「もう人の話聞いてくださいよ！」
エリスが腕をぶんぶん振っている。

「まあそれより。この世界って魔法があるのか？」

「はいありますよ」

ちよつと語気がすねている感じに聞こえる。

「例えばどんなのがあるんだ？」

「そうですねー攻撃魔法から、防御魔法、補助魔法、儀式魔法なんかがメジャーですね」

そこらへんは俺のいる世界のRPGと変わりないな…

俺のいるじゃなくて俺のいた世界か…いって悲しくなる。

「なるほど、次に兵種は？」

次々とタクミが質問するがエリスは、仕方がないという感じで返答をする。

「今味方にいるのが、ゴブリンとかスケルトン、リザードにウィッチがいます。」

「それぞれの特性は??」

「えーと、ゴブリンが棍棒と弓が武器で……スケルトンは、防御が最弱だけど何回でも生き返れる。そして、リザードが頭がよくってウィッチが魔法使いって感じ。」

「なるほど」

ようするに、

ゴブリンが雑魚歩兵。

スケルトンがゴミ。

リザードが指揮官タイプ。

ウィッチが魔法攻撃って感じか……意外に心もとないな魔王軍…

「本当はまだほかにもいるけど、どっかに行っちゃった」

「それなら、これから仲間にすればいいことだから大丈夫だ。」

「仲間について本当に世界を取るつもり？」

エリスは、タクミの言っていることを鵜呑みにできなかった。

「ああ本当だ」

「変な勇者を呼び出しちゃったよ〜」

「お前が呼び出しておいて嘆くなよ」

タクミが拳骨を一発かます。

「いったー暴力反対だよー！」

エリスは、頭を押さえている。

「本当に魔王の娘なのかこいつ……そんなことはさておき次は敵だ。まずは一番の目標である。神族について教えろ！」

「はいはい」

エリスが諦め顔をする。

「神族は、一番トップがオーディンでその下に11人の部下がいる。その部下がワルキューレで騎士と魔法使いがいて、攻撃力防御力ともに高い。」

「ちよつとまで……それってかなり厳しくないか……」

「そうなんだよ！あと神族はみんな空を飛べるから」

「なに！空からの攻撃ありだとただけチートな種族なんだよ」

タクミは、神族と戦う場合そうとうの被害をもたらすと考える。

「でも、神族はあまり戦いに介入しない。」

「それは、本当か??」

安心したような顔になる。

「うん、人族が神族の配下になつて魔族を攻めているの」

「なるほど……それで敵の本拠地は??」

「神界」

エリスがたった一言ボソツとつぶやいた。

「神界！？深海じゃなくてか！？」
エリスに詰め寄る

「そうです」

「それなら攻めようがないじゃないか」

「うん…でも一応地上の拠点があります。」

エリスが言ってから考えもせず

「よしそこを攻略する目標に入れよう」

「本気ですか！？」

「ああまってるよ…神族！！」
片手を上にあげる

その時ゴ布林らしき奴が慌ててこちらに来た。

「大変です。魔王様！！人族の襲来です。どうすればいいでしょうか？」

「なんですって！！」

エリスが青ざめる。そしてタクミがさっき話していることを思い出し
「おいおい、5千もいるの簡単に突破されすぎだろう」

疑問をぶつけてみる

「いや、主力は河口において来ています。今は50しかいません。」

「はあ50！！おいそのゴ布林A！敵兵力は！？」

タクミもこの状況に内心焦る。

「ワイは、ゴ布林Aじゃないジョンだ。」

「名前はどうでもいいから敵兵力は？」

「約1千！」

「どうでしょう？？タクミさん」

瞬間的に作戦が思いつく。

「それならいい作戦があるぜ」
「なんですか」

エリスが目を輝かす。

「孫子の兵法にも書いてあったが、敵が十倍以上の場合は、逃げるべしってな」

「それって……」

エリスは、わかってしまったがわかりたくない顔をする。

「おうそうだ！ここから逃げるぞ！」

「でもどこに??」

エリスは、タクミが逃げるといったのでどこに逃げるか不思議だった。

しかし、タクミはさも当然化のように

「たしか河口に主力がいるんだろ」

「そうです。でもそこまでの道が敵に包囲されていて川しかありませんよ」

「それなら川を下るしかない」

「どうやって船とありませんよ?」

エリスが考えている川を下る手段は、船しか思いつかない

「俺に任せる!!とにかく撤退だ〜〜」

「どうすれば……」

ゴ布林Aは困っていた。

「タクミさんに従って川まで逃げます。」

エリスは、タクミにかけてみることにした。

勇者として呼び出されたタクミを・・・

「へい!」

ゴ布林Aが走って行った。

「タクミさん川はこっちです。」

「おう！さすが頼りになるな！」

二人は、走って外に出て周りにいた魔族とともに川へと向かう。

2人+50人は、川にたどり着く。

川の広さは、そこまでで大きくないが川の流れが速かった。

「これからどうすれば??」

「よし、魔王の娘なら魔法位使えるだろう」

「はい!!」

「それならこちらへんにある木を全部切って川に流せー!!」

「できますけどどうするんですか？」

「みんなよく聞け、川に流されてる木にしがみついて流されろ!!」

タクミは、大声で叫んだ。

「本気ですか!？」

エリスも、タクミに負けないぐらいの声で言った。

「本気だ!みんなは生き残りたいだろう。それなら一緒に行こう!!」

この絶望的な瞬間をなくせる期待が大きかったので賛成の嵐だった。

「『『『『『おぉー!』』』』」

この様子を見たエリスが

「本当にやる気なんですわわかりました。風の大いなる力を鎌鼬かまいたちとなれ!!」

その呪文とともに周りにある木が切れて川の上の空中を待つて着水した。

「さすが、魔王の娘だけあるな」

「それほどでも」

少しテレるエリス。

「全員、川に飛び込め！！！」

「「「「「「「「「「おお——！！！！！！」」」」」」」」」」

バ
シ
ャ
ー
ン

一斉に川に飛び込んでいく。

「エリス！俺につかれ！！」

タクミがエリスと手を握る。

「えっ！えっ！」

「大丈夫だ死ぬときは一緒だから!!」

「そんなの嬉しくもありませーん!!」

バシャーロン

そうしてタクミとエリスは川の中へと消えて行った。

第三話 「部隊編成をなめるな〜!!基本中の基本だぞ!!」

「エリス!俺につかまれ!!」

「えっ!えっ!」

「大丈夫だ死ぬときは一緒だから!!」

「そんなの嬉しくもありませーん!!」

そうしてタクミとエリスは川の中えと消えて行った。

「ぶくぶく……ぷはっ…タクミさん?」

エリスが必死に木にしがみついている。

ただし、魔法を使わずいぶん楽な状況を作り出している。

「タクミ…さん……どこ!？」

エリスは木にしがみつきのながら、周りを見渡そうとした。

「タクミさんー!!」

「俺は……ここ……だ!」

聞こえたほうを見てみると確かにいた。

「タクミさん大丈夫ですか?」

「ああなんとかな」

タクミは、ちょうど木と木の間に挟まっていた。

「本当にですか？」

「ああ大丈夫……いややっぱだめ、エリスもう一本の木を飛ばしてくれ!!」

「ええー!!でも、誰かいたら困るじゃないですか!？」

「大丈夫だ誰もいないから!」

タクミはまったく見ずに返事をした。

「本当ですね!？」

「早くしてくれ!!!」

悲痛な叫びが水で響いた。

「もうわかりましたよ!風の理いんりにおいてそれをうちやぶる突風となれ!!」

エリスがいった瞬間片方の木が飛んで行った。

「助かったぜ」

タクミはエリスと一緒にの木へと移った。

「なんでとばされてハリマンね!!!」

なんか真上に向かって飛ばされている物体がある。

「なんか聞いたことある声だな、あああの時のゴ布林Aか!!」

「どうでしょう!？」

エリスが慌てている。

「それくらいで死んじゃあそこまでだったんだ。ありがとよ!ゴ布林A」

手を振る。

「死んでおりまへん!!」

ゴ布林Aジョンが、別の木へとしがみ付いて言った。

「おお生きてたか!!ゴ布林A!!死んだかと思ったぞ」

「勝手に殺さんといてやー！！あとわいは、ジョンやー！！」

ゴブリンAの突っ込みを無視したタクミは、

「あとどれくらいだ??」

「そうですねあと数分でしょうか」

「よし！その時が来たら、この木を飛ばしてくれー！！」

「何ですか??」

タクミの言っていることは毎度理解できないことが多いがそれでも信じることにした。

「大丈夫！！なるべく後ろの方に思いっきり頼む！」

タクミが大声で叫んだ。

「木を離して、泳いでけーー！！」

「……えーー……！！……」

全員不満そうな顔をしたが、方法がなかったため泳ぎだした。川岸には、味方らしき魔族が縄を投げたりしている。

「エリスしっかりつかまれよー！！」

「は……はい」

「いっくぞーー！！」

エリスとタクミは一緒に川に飛び込んだ。

「ぐふふ……」

川の流れが思ったより強く流されかける。

タクミは、こんな時に運動神経が良ければと嘆く。

「エ……リス……ぶはっ……何とかしろ……」

「……そんな……こと……い……れ……ても……無責任な！」

「……いいから……はやく……魔法……を使……え!!」

「……最初……から……つか……え……ば……よかつ……た……のに……」

タクミは、この世界で魔法を使えることをまったく頭に入れていなかった。

タクミが心の中で

「ここは、魔法を使えることを頭に入れておかない」と思った。

突然軽くなった。

「何で!?!」

隣を見てみるとエリスに周りが光っている。

それで、タクミはエリスが魔法を使ったのだと気づいた。

タクミは、川岸に行こうと必死に泳いだ。

エリスを抱えて、

「あれ……重い……」

エリスを見ると周りの光が弱まってきた。

「やばい!!」

タクミは、エリスの魔力が少なくなっていると思った。

「早くいかないと!!」

その後すぐに縄をつかんで何とか岸に上がる事が出来た。

「はぁーはぁー……大丈夫か? エリス?」

エリスの様子を見るとぐったりしていた。

「おい、起きろ!!」

バンバン

背中を思いっきり叩く。

そうすると、

「ごほっ！げほっ！いきなり叩かないで下さいよ〜！」

咳き込みながら怒っているエリスの様子をみて、ほっと一安心するタクミであった。

太陽が真上にあるから、昼ぐらいだな

「エリス様〜〜〜〜〜！！！」

大声で叫んでいるトカゲみたいなのが二足歩行で歩いていた。

「ああジョージさん！」

「大丈夫ですか？エリス様！？」

「はい何とか」

「あの…エリス。こいつ誰だ？」

「この人は、リザードのジョージさんです。昔から指揮を執ってもらっています。」

「なるほど」

「こやつは誰ですか？」

ジョージは、あやしい目でタクミを見た。

「この人は、勇者様です。」

「こんな、何も取り柄がなさそうな奴がですか！？」
訝しむ目でタクミをまだ見ている。

「何だ！？リザードD！！！」

挑戦的な態度で打って出るタクミ

「わしの名前は、ジョージだ!!」

「わかったが、俺が勇者様だ!!」

「そうです。ジョージさん。この人が本当です。」

エリスがタクミに肩入れしたので

「それなら信じましょう。」

ジョージは渋々頷いた。

「それで、生き残った人はどれくらいですか？」

エリスが聞いている部下思いな魔王様のなのだ。

「はい…31人です。」

「そうですか……」

表情が重くなる。

「それでも、包囲された状況からみると、ましです。」

「そういつてくれると助かります。」

「さすが、頭がいいだけはあるな!」

「タクミさんこれから、どうするんですか??」

「うゝんとまずは、部隊の再編だな。」

「そんなことするんですか？」

「部隊編成をなめるなゝ!!基本中の基本だぞ!!」

「確かにそうですね…それなら賛成です。」

「ジョージさんも賛成なら……」

おそろおそろ承諾するエリス。

「ああまずは、部隊再編からだ!!リザードと一緒にがんばるぞ!」

「ジョージだ!!」

そうして、無事生き残った魔王と勇者は、部隊再編を始めるのだった。

「何か最初っからみみっちいな」

第四話 「神族っておつかないな……」

「それですね。タクミ殿…言いにくいことなんですけど……」

「何だ？ ジョージ？」

「エリス様が、召喚の儀式を言っている間に、魔王軍の大半が逃亡してしまつて、今800しかいないんですよ……」

「何でそのことを早くいわない!!」

タクミの叫びが木霊した。

「えっ！ 本当ですか!？」

「はい…エリス様今残っているのは、古参の兵隊ばかりです。」

「そうなんですか……」

エリスが悲しそうな顔をする。

守って行こうと思つている矢先に集団逃亡したからだろう。

「それなら、別いいじゃないか、それに残っている奴らは、古参なんだろう!？」

「そうですね」

「新兵が、どんなにしようとも経験をつんだ奴らには、勝てないからちようどいいかもな。それで、残つた兵力は？」

タクミにとっては、過去より今のほうが対背だった。

「はい、ゴブリンが600、スケルトンが100、ウィッチが150、リザードが50です。」

「なんか…スケルトンがすごい抜けているな……。よしわかった、密に編成してくれ、戦闘部隊と特殊部隊、それに近衛部隊だ。」

「その…特殊部隊とは？」

初めて聞く言葉だろうから、簡単に説明をする。

「もつとも危険な任務をする部隊だ。だから、有能な奴を選んで、

そつから志願制にしてくれ。近衛部隊はエリスの護衛専門だからそこまで兵力をさかなくても大丈夫だ。」

「わかりました。エリス様は、それでよろしいですか？」

「はい、指揮はタクミさんに任せようと思うので……」

「それなら、ただちに編成をします。」

リザードD^{ジョージ}は、走って消えてった。

「なあエリスこの近くに町はあるか??」

「はいありますよ……でも何するんですか？」

「そりゃ、野宿はいやだから泊るところを探すんだ。」

手をぶらぶらさせて疲れていることをアピールする。

「なるほど……ってこの人たちを置いていくんですか!??」

「そりゃ、魔族がいたら。即戦闘になっちまう、その分人族に見える俺たちなら大丈夫だろう」

「そうですけど……おいていくのは……」

とてもためらいがある様子で悩んでいる。

「大丈夫だって」

「そうですか……」

「おい、そのゴブリン」

「はいな」

また、同じ顔を見て

「って、ゴブリンA生きていたのか??」

「先ほどは、ありがとうな、わいを飛ばしてくれて……」

笑いながら眉間を上げている。

「まあ……気にするな!!」

「気にするわ!!」

ジョンが近くにある角材を持った。

「二人とも落ち着いて」

取っ組み合いを始めようとしていた。

「魔王様に免じてゆるす。」

「誰がお前に許してもらわなあかん!!」

「もう!!二人ともケンカしないでください!!ジョンさん私たちは近くの町まで偵察しに行くので、今日はここに帰ってきません。」

「おお~~魔王様に名前をおぼえてもらうた!!感動や~~」
涙を流している。

「それじゃあ、とつと行こうぜエリス」

「はい」

二人は、近くの町に訪れた。

「意外に広いな」

「そうですね」

その時に橋を渡る一団がいた。

「あれは……」

一番偉そうな人が何かをしゃべっているのが聞こえた。

「くそつ、逃げられた!!せつかく魔王の娘を捕まえられるチャンスだったのに!!しかも、追撃したら木が降って来て、退却せざる負えない状況になったし……くそつたれ!!」

「なんか……怖いですね」

「あれは、俺たちを追撃した部隊だな、それに見事に俺の作戦は成功したな!」

「えっ!何のですか??」

「お前に木を、後ろに飛ばしきれて言っただろ。」

「ああ!!確かに」

エリスが納得した顔になった。

「それでの被害だな、たぶん。」

「へえゝ意外に考えてたんですね」

「意外にとはなんだ意外にとは…」
拳骨をくらわす。

「いったーい！。ほめたんですよ私！？」

「何かむかついたからな」

「理不尽な！？」

そうして、戯れているときに、突然空から誰かが来た。
甲冑で身にまとった女性だ。

「何だあれは？」

「あれは…まさか！！」

エリスがビビッている。

「おい、エリスどうしたんだ？？」

「あの人たちが神族です。早く逃げましょう。」

エリスは、俺たちを捕まえに来たかと思っているんだ。

「なるほど、あいつらが…」

神族は、背中に羽を生やしていた。

「ちよつと待て、どうやら俺たちじゃないようだぞ。」

「えっ！」

よく見ると、人族の隊長に向かっていた。

そしてその隊長が慌てて、

「何でございましょうか？フレイヤ様」

「エリス、フレイヤって誰だ!？」

「フレイヤは、神族の一番槍と言われている人です。」

「なるほど、強いのか……」

「なんじは、人身売買や売春行為で多額のお金を稼いでいたとは本当の事か??」

フレイヤが、人族の隊長に問いかけている。

そうすると、隊長は、青ざめた。

「い、いえ……何のことをおっしゃっているんですか?」

「そなたが、不正な行為で金を稼いでいるのか。と聞いている。」

「そんな事する筈が無いじゃないですか!？」

フレイヤが剣を構えた。

隊長が後ろに下がって行っただが、橋の手すりにぶつかった。

「オーデイン様より、そなたが嘘をつかなければ軽い罰でよいが、嘘をついた場合殺せと言われている。」

「ひっ!…ひっ!何で……!?!」

「お前に最後のチャンスを与えたのだが、残念だ。」

「っ!?!」

次の瞬間。

隊長の頭が吹っ飛んで、体は川へと落ちて行った。

「肅正完了。そなたたち行ってもよいぞ」

後ろに待つて行った兵たちは、みな走つてこの場から去つて行った。

「エリス…神族はあんな感じなのか!？」

「はい、そうです。人族、魔族関係なしに、肅正していつてます。」

「神族つておっかないな……」

タクミ自身、その光景を見ているときにつばを飲み込んでいるのに
気付いていない。

フレイヤがこちらを見た。

俺は、一歩も動けずに固まってしまった。

そして、目線を上にあげて飛んで行った。

「俺たちを見逃したのかな？」

「はい……たぶん……」

「こんなところにはいないで、さっさと行こうぜ」

「そうですね」

二人は真っ赤な夕日が見える中、宿屋を探しに街の中へ駆け足で入
つて行った。

第五話 「……勇者が魔剣を持つか！？普通！！」

ここは、ヴァルハラ宮殿。

神族の唯一の地上拠点。

そこには、大きな翼をもった女性と、甲冑で身にまとった女性がいた。

「オーデイン様ただいま帰還しました。」

甲冑で身にまとった女性がひざまずき、そう言った。

「よくやりましたね。フレイヤ」

大きな翼をもった女性が返事をした。

「は、はい。もったいなきお言葉……一つ報告しなければならなかったがあります。先ほど訪れた町で魔法の娘ともう一人不思議な男がいました。命令になかったために放置しました。」

「魔王の娘ともう一人の男は、別の世界の勇者です。」

下に向いていた顔をあげて

「勇者！？すぐに殺した方がいいのでは？」

「大丈夫です。すでに対策を講じてあります。もうすぐ現れるでしょう」

一人の少女が歩いてきた。

「まったく、バカ兄貴がいなくなったと思えば、なんでか私までこんな変なところにいるのよ」

「来ましたか、ようこそヴァルハラ宮殿へ」

初対面の人にケンカ腰に

「あんた誰？」

「私の名前は、オーデイン。改めて歓迎します。 両羽^{りょうは} 千夏^{ちなつ}さん。そして、両羽 巧の妹さん」

そんなことを気にしていないかの様子で言った。

「何で私の名前と家の^{うち}バカ兄貴の名前を!？」

突然兄の名前が出てきた少女は驚いた。

ヴァルハラ宮殿でどうなっているのか知らない二人は、宿屋を見つけて泊ることにした。

宿屋の中は、ぼろくてランプが一つしかない暗い場所。

「今の状況じゃまずいな……」

椅子に座ってタクミはうなっている。

「だから、行ってるじゃないですか!無理だつて!」

エリスもここぞとばかりに抗議する

エリスの言葉を無視し

「まあ、それはおいおい考えるところとして、魔法軍の歴史について教えてくれ。」

エリスは突然聞かれたので何事かと思っている。

「急にどうしたんですか」

「いや、何で負けたのかと思って。」

「それは……」

物思いにふけりながら語り始める。

私は昔を思い出す。

私たち魔王軍はお父様の魔剣と采配をもって連戦連勝をしていきま

した。

このまま人族に勝つかと思われたのですが、そこで現れたのが神族です。

戦っていると突然空が光り翼を持った人達が下りてきました。

そして、私たちの軍のみを攻撃してきたのです。

その時は、何とか逃げ偽る事が出来ました。

そして、たびたび来る神族を撃退はしていましたが、被害が多く。

お父様は、神族、人族と和平を結ぶことにしたのです。

そして神族はそれを承諾して、この戦争は終わりを迎えたように思えたのですが。

その和平調印の場で、神族の主のオーディンがお父様を剣で後ろから刺したのです。

その後、すぐ戦闘になりお父様は何とか生きている状況でした。

そんな時私に、

「後の事は、お前に任せる。この魔族を栄えさせるのも滅ばすのもお前の好きにしてい」

と言ってくれました。

そして重臣たちに言葉を残してから息をしなくなり死にました。

その後魔王軍は、連敗の連敗を重ねて自然に崩壊しました。

生き残った少数の兵と共に私たちは逃げて、最後の希望を勇者召喚

にかけたのです。

「そこから、タクミさんと出会って今といたるわけです。」

「なるほどなーこの話を聞くと神族が悪いみたいだな。」

タクミの言葉に反応してエリスが興奮気味に

「そうです!! 私のお父様を殺して……」

「わかったから落ち着けて」

エリスは、はつとなる。

「すい…すいません。タクミさん」

「事情はわかったから。」

「それで……次に行きたいところが出来ました。」

エリスは突然、決意をした目になる。

「行きたいところ?」

「今の話で思い出したのですが、ここから西にある森に、お父様の使っていた。魔剣があるんです。それを取りに行こうかと思っています。」

「魔剣!?!」

「そうです。それをタクミさんが使えばこの状況を覆せれると思っ
くつがえ
んです。」

「俺が魔剣!?!」

「勇者なので魔法などの素質があると思います。」

エリスの一つ一つの言葉には、迫力があつた。

「……勇者が魔剣を持つか!? 普通!!」

「でも、これしかないんです。お願いします。タクミさん!」
「わかったから」

俺は相変わらず、女の子のお願いには弱いらしい。
だって男だもんしかたない。しかたないよね! うん。

「よし、明日には出発したいから今日はもう寝ようぜ」
「はい」

そうして夜が明けた。

「それじゃあ、全軍に伝えてくれ目指すは魔剣が眠る場所だ!」
魔王軍一同、魔剣が眠る場所へと移動を開始したのであった。

「本当に勇者が魔剣を持っていのか!」

第六話 「お前にみんなが付いて来てるだろ!？」

魔王軍総勢800人は、一路魔剣が眠る森へと進路を取っていた。

エリスとタクミは、徒歩で移動している。

「なあ、エリス、馬はないのか？馬は？」

まだ歩き始めて2、3時間しかたっていないのだがタクミは、すでに疲れた様子を見せ始めた。

「まだ、歩き始めたばかりじゃないですか!？」

エリスは、疲れなど一つも見せずに歩いている。

「ちかれた」

「まったく、それでも男なんですか」

余裕満々な顔をして言う。

「そんな俺は、元いた世界では、アウトドアのひきこもりで町では通っていたんだから!」

「アウトドアで引きこもりっておかしくないですか!？」

エリスがもっともらしいことを言った。

感慨深い顔をして

「外に出るのは好きなんだが、趣味がなくて引きこもってばかりだったからな」

「引きこもって何してたんですか？」

「本ばかり読んでたかな」

ちよつとびくりして

「本ですか!？今のタクミさんには一番似合わないですね!」

言ってから、エリスは殴られるかと思つて頭をガードしたが殴つてこなかった。

「そうかもな……」

予想外の言葉にエリスは驚いた。

「確かに俺は変わったのかもな……ここに来て」

タクミは、今まで親父たちに囲まれていたせいか普通じゃ考えられない体験を何度もしてきた。

その中で本を読む行為は、心が静まったために好んで本を読みふけていた。

そんな生活を送っていたタクミからしてみれば今みたいな生活もありなのかなと思う心があるのかもしれない。

「タクミさん……」

エリスは気まずそうな顔を作る。

「ふにゃー！にゃにすりゅんですっか！タクミしゃん！！」

急にほつぺたをつかまれて慌てるエリスに

「何暗い顔になっているんだよ！お前は笑ってるかアホなこととしてればいいんだよ」

「アホなことってなんですか！アホなことって！」

先ほどの雰囲気とはうって変わって賑やかな感じになった。

「もう……タクミさんは」

エリスは微笑んだ。

「何だよ。」

ちよつと照れたタクミであった。

その後小休憩を取りつつ進軍していき、あと四分の一まで差し掛かったところで空がオレンジ色に染まり、太陽が沈みかけたために野営することになった。

「食料とかは、大丈夫なんだろう？」

「はい、あと2、3週間分はあります。」

「しかし、なんでそんなに準備がいいんだ？」

タクミは、敗走してきた魔王軍にしては、武器や食料が多くある。

「それはですね…魔王上に会った秘宝やお宝をすべて売ったからです。」

苦笑いをする。

「それは、凄いな！お前もなかなかやるな」

タクミがエリスの事をほめている。

「…そんなことないですよ…ただみんなの事を考えてですね…そうしたほうがいいかな…なんて思ったただけなんですから」
もじもじしながら返答をした。

「何照れてるんだ？俺はそこまでしてお金が欲しかったのに驚いているだけだぞ」

タクミは、ほめたことが照れ臭かったのでごまかした。

「そんなひどいです。お金なんていりませんよ！」

「じゃあ、俺にくれよ」

ポケットから巾着みたいなものを出してきて

「今これだけしか…」

チャリン出てきたのは、銀貨3枚だった。

「まじか？」

「はい…」

タクミが銀貨3枚をこれでもかっていうぐらい眺めた。

「本当々にこれだけか？」

もう一回確認する意味も込めて聞いてみる。

「はい…そうです。」

「これからどうするんだ？」

「どうしましょう？」

「質問を質問で返すな！！」

タクミは内心呆れはしたが、エリスはぬけているところがあるなと思った。

「これからいつて魔剣を取ってから考えましょうよ…ね！」

ごまかすように早口で最後の『ね』をやけに強調させた。

「はあゝお前も人のことが言えないくらいいい加減だな」

「そんなことないですよ」

やけになったように反論してくる。

「いやいや、そんなことあるだろう。自覚してないだけだろ」

「そんなことないです。」

二人がいがみ合っているところに

「ご飯出来ましたよ……」

おそるおそる、骨人間が話しかけてくる。

「うん？誰だこいつ？」

「私は、スケルトンの骨子といいます。」

「そのまんまだな」

見た目通りの名前だ。

「わかりました。すぐ行きますね」

骨子は、どこかに行ってしまった。

「エリス、さっきの事は水に流そうか」

「そうですね。流しちゃいましょう」
ようやく二人の意見が一致した。

食事中

「こういう感じもいいな」

周りでは騒いでいてとても楽しい感じになっている。

「そうですね。私もそう思います。」

エリスも周りを見ながらつぶやく。

「私は、こんなみんなの笑顔が見たくて戦っているのかなって思う時もあります。」

「そうか……軍を率いる者の心構えとしては十分だな」

タクミは、にやつと笑う。

「何で笑うんですか？」

「これから、勝てる気がしたからだ。」

「勝てる気が？」

エリスが首をかしげる。

「お前にみんなが付いて来てるだろ！？」

「でも…私なんて軍を率いる資格なんてないですよ……」

落ち込み気味な発言をしたエリスに向かってタクミは、

「エリスが軍を引っ張っていき、そして俺がお前の頭となって引っ張ってやるから心配するな。」

タクミがやさしい笑みを見せながらエリスに言ったため。

エリスは、呆然としつつ頬が少し赤くなる

「何ですか？急にそんなこと言いだして」

「エリスにこれだけは言いたかったからな」

「そうですか」

そうして、月の下で二人は、仲をより仲良くなり、魔王軍は踊って舞った。

朝日が見えるころに……

「大変だ〜大変だ〜人族の部隊が来た〜」

偵察に出ていたゴブリンが慌てて伝達してきた。

「ふわぁ〜〜〜寝み〜」

あくびを殺しながら髪をぼさぼさとかいている。

「そんなこと言わずに、どうするんですか？」

自信満々な顔で

「昨日行っただろう、俺がエリスの頭になって引っ張ってやるって」

「そうですけど……」

タクミは立ち上がり

「よし、人族を迎え撃つぞ!!」

魔族と人族の戦いが始まろうとしている。

第七話 「全軍停止！！このまま陣形を整えろ！」

タクミ達は、敵の兵力を探るため最初に偵察を出した。

そして1、2時間したら偵察に出したゴブリンが返ってくる。

「兵力はどれくらいだ？」

「1000後半ぐらいです」

あいまだが、見ただけで数を数えるのは難しいから仕方ない。

「倍ですか……」

エリスは、タクミの方を見る。

「倍だな！よし、今から作戦を言うぞ」

タクミは、兵力など関係ないかのような雰囲気を出している。

「大丈夫なんですか？数も不利ですし、地形も左右が山に囲まれていて、一本道みたいなどころなんですから」

不安の要素がたくさんあったためエリスは、大丈夫なのか心配している。

「ああまかせとけ！」

タクミは、魔剣の事しか考えていなかった。眼中になかったのだ。

敵の事など……

場所が変わって、人族の軍隊。

「申し上げます。敵は、前方に陣を張っており、横長い陣を引いております。数は、不明です。」

若い偵察兵が指揮官の所まで来る。

「なんだと！どうしてもっと、詳しく調べなかった。それでは、兵力もわからんではないか！」

戦いははじているというのに、右手にビールのジョッキをもち、イスに深くもたれかかっている人物がこの部隊の指揮官が言った。

「くそっ！これでは、作戦がたてれんではないか！」

机にジョッキを思いつきり置いた。

その音に驚いた若者は、そそくさと出て行った。

そして、横に控えていたいかにもエリートの上官学校を出ましたみたいなのが指揮官の前にきた。

実際そうなのだが。

「魔族におそるに足りません。ここは兵力で押していきましょう。」

「まあ、そうなんだが」

指揮官は、経験上では危ないと思うのだがこの参謀は有能なことから士官学校から派遣されてきたためある程度は言うことを聞かなければならない。

「ふむ、お前に任せてみよう」

「ははっ、ありがとうございます。それでは、横一列に並んでいるので三つに部隊を分けてそれぞれでぶつけていきたいと思えます。指揮官の目が少し大きくなる。」

「部隊を三つかに分けるのか……まあいいだろう。編成もお前に任せる」

「わかりました。お任せください。」

そうして、若い参謀は出て行った。

「グスバルね……あいつは使えるのだろうか？」

グスバルと呼ばれる若い士官は、着々と準備を開始した。

そして、昼過ぎのころグスバルは、部隊を三つに分けてそれぞれ、歩兵同士の戦闘が起きるかと思っただが、敵は逃げて行った。

「ふんっ、やはり魔族なんてただのクズだな！」

そして、顔のおでこあたりに手を置き笑っている。

しかし彼自身きづいていなかった。

これがすべて読まれていることを……

山の中に、大勢の兵力と二人の人物が潜んでいた。

「やっぱり、こう来たか」

タクミは、笑っているまるで獣を追いこんでいるような感じで

「タクミさんどうして、三つぐらいに部隊を分けるなんてわかったんですか？」

ちよっと疑問を持ったのか小声で聞いている。

「それは、横一列に並んでいるときに一番気を付けないといけないのが、横からの挟撃だ。そしてそれを効果的に防ぐために、分散させてのだろうがあの部隊の指揮官が参謀の腕はそこで終わりだ。本質を分かっていない。」

「本質ですか？」

頭の上にはてなマークが浮かんでいる。

「ああ、部隊を分けるって事は兵力を分割して数が少なくなってい

る。だから隠れている部隊でも十分に対応が出来る。こいう時に便利だよなスケルトンって」

タクミは、スケルトンがただのゴミだという考え方を改めた。ただしエリスからするといくら死なないからと言っても捨て駒みたいに扱うことを少しためらっている。

「まだ…なんですか？」

スケルトンの人たちをかわいそうに思ったエリスは急^せかすようにタクミに話しかける。

「もうちょつとだ……」

そして、山の中でひっそりと息を静めていることを知らないグスバルは、勝てると確信したために慢心している。

「そのまま押し切って！……！！」

そのまま勝てるかのように思えた戦場。

しかし、グスバルの見た光景は、悪夢だった。

三つの部隊のうち、左右の部隊が魔族によつて攻撃されていたのだ。

「魔族にあれだけの兵力があつたのか！？」

確かに目の前の光景は信じられないことが多いだろう。

「申し上げます。」

傷だらけの兵がこちらに方向を持ってきた。

「中央の部隊からですが、敵主力だと思われる部隊は、少数しかいません!!」

「そうか……」

そして、愕然とする。

「あと少しだ。落ち着け」

「落ち着いてます。」

そして、敵部隊が真横に来たところで

「おー！！！」

そしたら、その勢いにのまれて押されて中央に人族の軍が集まり、
だんだんと包囲される形が出来てきた。

「なんで、後ろを開けておくんですか？」

エリス達は、全体がある程度見える丘に来ていた。

「それは、囲むと敵が追い詰められたと自覚して最後の奮戦をしてこちらの被害が多くなっちまう。でも、一か所だけ開けておくところに逃げれると思ってどんどん逃げてくれるから、その後ろから攻撃したほうがこちらの被害が減るからこの陣形なんだ。」

「なるほど」

エリスは、納得した顔を見せた時にタクミの言った通りに敵は逃げ始めてこちらが追う形となった。

敵を散々追い回して途中で

「全軍停止！！このまま陣形を整えろ！」

タクミの言葉で敵を追うのをやめ始める。

「こんなもんでいいだろう。」

タクミは、魔王軍の強さを確認できた意味でも今回の戦いは有意義だった。

「そうですね！」

エリスは、タクミの作戦がしっかりとあることを知って内心驚いている。

いつもポケットとして何にもできそうにないようにしているのに今のタクミは、単純にいくつも作戦を考えてしっかりと実行しているところすごいと思った。

「このまま、一気に進もう。魔剣の眠る森まで！」

タクミの言葉で全軍は動き始めた。

第八話 「おいおい、言わんこっちゃない……」

グスバルは、逃げて行っている部隊を見て何も言えなかった。

「グスバル…お前の慢心が招いた敗北だな」
いつの間にか指揮官の男が来ていた。

「すいません。ゴルバ殿」
頭を下げているがその顔はくやしさを唇をかんでいる。

ゴルバというのは、今回の指揮官の名前で勇猛果敢だが上官の命令を聞かないため部隊長どまりの男である。

「次は、俺が指揮をする」

「次？」

今回の戦いは惨敗で終わったにも関わらずゴルバは次の機会を狙っていた。

「次ですか……」

「ああ、もうすぐで増援の部隊が1000人、来ることになっている。それと今の部隊を合わせて再度叩くぞ!!」

ゴルバは自信満々で魔王軍の事を狙いつつ退却するのであった。

一方魔王軍は、そのまま魔剣の眠る森へと進んでいた。

「魔剣ってどんなものなんだ？」

二人が並んで歩いているときにタクミが聞く。

「お父様が持っていたものです。名前はダーインスレイブと言います。」

「ダーインスレイブ……」

名前からして魔剣っぽくタクミ自身持てるのか自信がなくなっている。

「これは、お父様から聞いたただけなんですけど、なんでも戦場を一瞬でか減る事が出来るらしいです。実際お父様の攻撃で戦場が変わるのを何回も見てきましたから」

「戦場が一瞬で……」

タクミは、その魔剣を手に入れば魔王軍をかなりいい所まで立て直せると確信した。

「それじゃあ、速く取りにいかないとな」

「もう、待つてくさいよ」タクミさん！

タクミの歩幅が大きくなり駆け足気味で歩いていくのにエリスは後ろからついて行く。

夕方あたりに差し掛かり野営することになった。

本当なら今日中に着く予定だったが戦闘をしたために一回休息を取る必要があったのだ。

「あと、少しだな」

タクミは、もう少しで魔剣の所に行けるといって高揚感に浸^{ひた}っていた。

「もう、子供見たいですよ。タクミさん」

エリスは、そんなタクミが面白くて笑う。

「タクミさん、少し頭を冷やしに行ってきた方がいいですよ」

「……そうかもな」

タクミ自身とても興奮していることに気付いたので

すこし、雑木林の中へ行く。

「しかし、本当にありえないことだらけだよな…魔剣とか魔法とかRPGだけかと思ってたのにな」

そんな風に感慨にふけていると

「助けてくださーい!!!!!!!!!!」

急に女の人のかわいらしい叫びが聞こえた。

「うん…これ、前に聞いたことあるような……」

少し考えてみてもわからなかったためいつて見ることに、そして、腰にかかっている剣の鞘の部分を持ちながら声のする方へ向かっていった。

「助けてくださいー」

月明かりが木によって防がれており少薄暗い林の中にその人物がいた。

「お前は、骨子か!」

前にご飯の時に呼びかけてくれたスケルトンの骨子がいた。

「…で…何で頭だけなんだ。」

骨子は、頭蓋骨の頭だけこちらを見ていた。

「私 転んで体がバラバラになっちゃったんです。」

「バラバラ……」

周りを見てみると、確かに骨らしきものが散らばっている。

「タクミさん、直してください!!」

頭蓋骨の口の部分だけが動いている。

「これを、直すのか……」

周りには、三ヶタ行くのではないかと思えるぐらいの骨が散らばっている。

「お願いしますよ……」

「いや…俺には無理だ。ありがとくな骨子。ご飯のときに読んでくれて」

タクミが後ろを向いて帰ろうとして

「ちょっと待ってくださいタクミさんひどすぎます。」

骨子の叫んでいる。

「私なんて戦場でも体に触れるだけでバラバラになってその後には体中を踏まれるだけな存在ですけど助けてくださいよ……」

「それは何ていうか…残念だな」

タクミは、振り返って言う。

「残念でもいいですから助けてくださいよ……」

骨子の口がカチカチ言っている。

「ああ、わかったよ!」

そうして、タクミは、骨子の修理を開始した。

「えーと、ここは、これでいいのか?」

「違いますよ…なんで手と足が同じところにくっついてるんです

かゝ」

「ああー面倒くさい!」

その後ちよつとづつ直していき

「ふうー終わった。」

ようやく骨子の体が戻ったのだ。

「いったい何時間かかったんだよ……」

頭のあたりの汗を手で拭い取る

「タクミさん、ありがとうございます。それではこれで」

骨子は走って去っていく。

「おい、骨子走っていくと……」

「キャ!」

骨が散らばる音がした。

「おいおい、言わんこっちゃない……」

目の前には、骨子の骨が散らばっている。

「タクミさー……ん……」

「わかったよ直してやるよ」

その後さつきと同じ通りに直していき

「さすがに一回やったことがあるだけに早く終わったぜ」
タクミは、このことを自分で言ってなんだか切なくなった。

「ありがとうございます」

骨子がお礼を言う。

「ああ、ゆつくり帰れよ」

そのまま、骨子とは別行動をとった。

「大丈夫かなあいつ……」

タクミは、骨子のことを少しでも心配した。

でも、

「スケルトンの組み立てに慣れても得ないな……」

ちよつと損したようなくわからない気持ちになった。

戻っていくと

「タクミさん！どこ行ってたんですか!？」

エリスは、心配そうな顔をした。

「ああちよつとな……」

エリスに心配させてことに申し訳なさを感じるが骨子の事はあまり話したくなかった。

なんせこつちに来て一番疲れたことだからだ。

「そうですか……」

エリスは、小さくうなづいた。

夜が更けて行く。

第九話 「…ってお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのは!？」

ヴアルハラ宮殿では、一日休んだ千夏がオーデインに会いに来ていた。

「おはよう。千夏さん。」

オーデインは、前回会った時とほとんど同じ位置にいた。

「それで、決めてくれましたか？」

まっすぐとした視線で聞いてきたため、

千夏は

「はい、決めました。私は、バカ兄貴を連れ戻す！」
こぶしを握りしめた。

「わかりました。しかとその覚悟を受け取りました。それでは貴方には、人族の部隊を率いて魔王軍と戦ってください。」

「私が指揮をとるんですか？」

千夏はいままで一度も指揮なんてとつたことがなかったので心配だった。

「大丈夫ですよ。あなたにならできます」

「っ！」

千夏は、震えた。内心をオーデインに悟られたからだ。

そして、体の中にとても冷たい何かが残った。

「あなたに渡したいものがあります。」

そうして、オーデインが後ろから持ち上げたのは、長さが2メートルぐらいあるでかい大剣だった。

千夏は、オーデインがもともと渡すために後ろにおいてあったので私の心を読まれたとかそんなことを考えたが、目の前の大剣に心を

奪われた。

「……………」

何も言えないほど何かすごいものを感じ取った。

「これは、聖剣エクスカリバーです。」

「……エクスカリバー……」

「太古より、邪なるものを倒してきた聖剣です。あなたにはこれを使って魔王を倒し兄を取り戻してください。さあ、こちらに……」

そして、千夏はオーデインからエクスカリバーを受け取る。

「軽い……」

持ってみて重いと予想したのだが以外にも軽かった。

「それは、あなたに聖剣がなじんでいるからです。」

「なじむ？」

首をかしげる

「エクスカリバーがあなたを認めたのです。使うごとにどんどん強く使いやすくなるでしょう」

「そうですか……」

「それでは、あなたはブリュンヒルドを付けてあげます。」

そうして現れたのが金髪のショートヘアの女性だった。

「オーデイン様。何なりとお申し付けを」

ブリュンヒルドはひざまずいている。

千夏はその様子を立ったまま眺めている。

「そなたには、そこにいる千夏さんを助けてもらいたいです。」

ブリュンヒルドは、ひざまずいたまま千夏の方を見た。

「かしこまりました。」

「それでは、千夏さん、ブリュンヒルドよろしく頼みますよ」
オーデインはその言葉を残すとそのまま何も言わなくなった。

そして、二人は出て行った。

妹に狙われていると知らないタクミは、魔剣の眠る森に着いた。

「はぁーやつと着いた！……ってここで会ってるのか！？」
タクミの目の前に広がっているのは、昼にもかかわらず薄暗い森だった。

「はいそうです。」

エリスこくこくと首をふる。

「まじかよ……もっとお城とかとてもでかいお墓にありますとかそういう設定はないのかよ！！」

「タクミさんは、いったい何に期待してるんですか？そんなのすぐに見つかって取られちゃうじゃないですか！」

「ああそうかよ」

タクミは項^{うなだ}垂れる。

「もうそろそろ来ると思います。」

エリスは、誰かを待っているかのようなそぶりを見せる。

「誰がだ？」

「ここを守っている部隊です。」

「ここに部隊がいるのか兵力はどれくらいだ？」

タクミにとって兵力を増えるのは願ってもないチャンスだった。

「確か：1000人ぐらいいたような」

エリスは指を顎に添えて考えて言った。

「1000人つてどこいるんだ？」

見た感じ薄気味悪いただの森しかなかったので不思議に思っていると

「エリス様おひしゃしゅうございます。」

そうして現れたのが魔法使いみたいな服を着ていかにも怪しい宝石をついた杖を持っているよぼよぼのおじさんが出てきた。

「ジェンじい！久しぶりです。」

そうして、エリスとジェンじいは、はぐをする。

「だれだ？こいつ？」

タクミが不思議そうな顔をする。

「この人は、リッチのジェンじいです。お父様に古くからつかえていて。私の魔法の先生です。」

「リッチっていうのは？」

リッチというのがわからなかったタクミは聞いた。

「魔族の中で一番魔法が使える人たちのことを言います」

「なるほど」

紹介されてジェンじいがタクミの前に来る。

「ふおおおおーエリス様は、召喚の儀式に成功したのですね」

「はい。」

「……ってお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのは！？」

ジェンじいを指でさしてタクミは驚く。

「そうです。ジェンじいが起死回生の魔法として召喚の魔法を教えてくださいました。」

エリスがそういうと

「お前のおかげでこっちは巻き込まれたんだぞ!!」

タクミは、叫んだのだがジェンじいは、無視する。

「わしの魔法間違えたかの」

手を顎においてさすりながら言った。

「何だとこのじじい！俺を読んでおきながら!!」

タクミは、食って掛かる。

「二人とも落ち着いて、タクミさんの指揮のおかげで二回も救われています。」

「それならよいのじゃ、それでエリス様要件は、魔剣を手に入れることでいいのですか？」

さも、先の話はどうでもいいかのようにエリスと話す。

「はい。」

エリスははつきりと頷く。

「この男に適性があるのか楽しみじゃのう」

不気味な笑いを浮かべている。

「それじゃあ、行きましようタクミさん」

エリスがタクミの袖を引っ張る。

「ああ……」

タクミは、ジェンじいの言っていることに疑問を持ちながらエリス共に深い森の中に入って行った。

そして、小さな穴があった。

「ここです。」

エリスが指をさしている

「ここか……」

中の様子は良く分からないが不気味なオーラを感じる。

「それでは、タクミさんこれを持って行ってください」

そうしてエリスは、タクミに灯のともったろうそくを一本を渡す。

「これから俺一人か??」

「そうです。頑張ってください」

そうしてタクミは、穴の中に入って行く。

「けっこうな。広さがあるな」

周りを見渡すと人が二人ぐらい余裕でおれる道があった。

「あそこか……」

急にひらけた場所に出て目の前に周りに術式みたいなものが書かれているところで剣が浮いていた。

「これが、ダインスレイブ……俺の物にしてやるよ！」

タクミは、手を触れた。

そうすると突然闇に包まれた。

「なんだ？」

「お前は、誰だ？」

声が聞こえたうす気味悪い声が……

「私は魔王だ。」

いきなり魔王に会ったのだった。

第九話 「……ってお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのは!？」 (後書き)

感想や評価などを待っています。

第十話 「まさか……魔王!？」

「私は魔王だ。」

「えっ!!」

声は聞こえるのだが姿がなかったため内心で焦っていたがなるべく顔に出さないように心掛けた。

「それでお前が魔王か……」

手に汗をかきながら聞いた。

「いかにも、私が魔王だ。」

やはりどこから話しているのかわからない。

「それなら要件が早く済みそうだ。とつとと魔剣をだせ!」

「まあ、そう焦るな少し話しよう」

なんか急になれなれしくなった。

「何のだ？」

「エリスは、元気にしてるか……?？」

弱弱しい声で言われたためタクミは、少し引く。

「…ああ、元気だぞ。魔王軍をしっかりと引つ張って行っている。」

「そうかそうか、さすがは私の娘だな!」

なんか声が明るくなっている魔王を見てタクミは確信した。

「お前、親バカだろ……」

魔王がちよつと焦った声で

「何バ力なことを言っているんだ。ただ……娘を可愛いと思って当然だろ！！なあ！お前もそう思うだろ！！」

「まあ、確かにかわいいな……」

「可愛い……だと……」

少し変な間が流れた。

「お前！私の娘に何かしたな！！あまりにも可愛いからってやってもいいことと悪いことがあるぞ！！今すぐにお前を消してやる」

「えっ！！ちよつと、エリスのお父さん……いきなり消すってないんじゃないですか……」

いきなり怒られたタクミは、焦りつつ逃げる場所がないためどうしようもできなかった。

「お、お前なんかにお父さんと呼ばれたくないわ！！汚らわしい！」

「こつちだつて、お前がエリスを生んだことが不思議だよ！」

タクミは何かむかついたために反抗している。

タクミ自身消されると言われて黙ってはられないのだろう。

「何！わしを愚弄するどころか娘の悪口を言うのかお前は！！」

どこにでもいる親バ力なお父さんみたいだった。

魔王の威厳も何もそこにはなかった。

「エリスがああの性格なのも頷けるな……こんな父親を持ったらな……」
タクミはため息を一つ。

「ちよつと甘やかしすぎただけだ……」

ちょっと言い訳じみた感じに魔王がつぶやく。

「ちょっとじゃないだろ絶対に！教育の仕方が根本から間違っているぞー！！」

タクミはなんか…立場逆転してないかなと心の中で思った。

「わしだって、心配で心配でこうしてエリスが魔剣を取りに来るのを待っていてサプライズにしようかと思っておったのにお前なんかむさくるしい男が来るとは思わなかったわい。」

「サプライズって…死んでないのか？？」

そうすると紫色の塊が出てくる。

「体は滅びても魂はちゃんとあるからな」

タクミは触れようとしたが触る事が出来ず通り過ぎて行った。

「なるほど……で、お前はこの状況をどうにかしようとしなのかな…」

タクミは、今までとは違う真面目な顔をしていったため、魔王はそれに答えた。

「わしは、死んだのだ。今は魂でしかない。だから、すべてをエリスに任せた。」

「エリスが大変な目にあっているのを知っててか！！」
ちよつと興奮気味で言ったため語気が強くなる。

「ああ、わしは全てをエリスに託したのだ。逆に信頼におけるだけの器になったと思ったからだ」

タクミは、確かに今のエリスは軍を率いていけるだけの器はある。

「エリスは、苦しくても頑張ってたんだぞ！それを見ているだけか

「俺はエリスを助ける。だからとつと魔剣をよこせ!!」

タクミは、叫んだ魔王に向かってだけではなく誰かに向かって叫んだ……

「わかった。お前の覚悟は、しかと聞いた。それではお前に素質があるか確かめる必要がある。」

魔王の魂らしい後ろに一本の剣が出てくる。

大きさは、1メートル50センチぐらいだろうか、細いスリムな剣が出てきた。

「ただし、素質がなかったらお前の命を食べてしまう剣だ。この剣に認められたものだけが扱える事が出来る。お前にそのことを分かっているか？」

「そんな事、百も承知だ。俺は、エリスを助けるためにこの剣を取ってやる。」

タクミは、ここに来る前はただ本を読んだりして何も面白くない時間を過ごしていた。

それこそ太陽のように時間通り上がって時間通りに沈んでいくそんな生活を送っていた。

でも、エリスがこっちの世界に呼んでから一変した。

まだ数日しかたっていないがそれでもいろいろなことが楽しめたことが何よりうれしかった。

楽しかった。

だからもととエリスと一緒に何かをしていこうと思った。
これからもっと大きい事が出来ると思ったから・・・

「覚悟してやるよ」

そうして、魔剣を手にとると、周りに黒い何かが渦巻いた。

しかし、怖いなんて思わなかった何でか少し暖かく感じた。

「これは……死ぬのかな……」

そう感じたのだが渦は収まっていき自分の手には剣がしっかりとあった。

「ほぉーっ！ ダーインスレイブが認めたかお前を……」

「手に入れたのか俺がこの魔剣を……」

剣を持つてみると意外に軽く竹刀を持った時と同じ重さだった。

「お前は面白いな！これから楽しみだ」

景気よく笑っている魔王。

「何でだ??」

「お前は、魔剣に認められたのだからな
言っている意味が良く分からなかった。

「これは、楽しみになった！」

ケラケラと笑う魔王だった。

「そんじゃあ、俺は戻る。じゃあな」

「どうやってだ？」

確かに周りは暗闇に包まれている。

「そんなのこうやるんだ！」

ダインスレイブを一振りしたら周りがパリンという音と共に先ほどいた洞窟へと戻ってきた。

タクミは、洞窟から出ると

「タクミさん!!」

倒木の上に座っていたエリスがこちらに走ってきた。

「大丈夫でしたか!？」

心配そうにして来たのでタクミはダインスレイブを見せる。

「ほらな!!」

「それは、ダインスレイブ……タクミさん手に入れたんですね!!」

「ああ!!」

二人して、抱き合って喜んでいたのだが、

「ワァン!!ガウウウー!!」

何やらイヌかオオカミの声が聞こえてきた。

後ろを見ると、

（わしのエリスに何するんだ）

タクミの頭の中に言葉が響いた。

「まさか……魔王!？」

タクミと一緒に元魔王の体長約1メートル後半のでかいオオカミが出てきたのだ。

R a m b l e ウィーンから愛をこめて……………(前書き)

番外編です。

今日はハロウィンなので、そのネタの過去編をひとつ書きました。

本編とは、少ししか関係ありません。

Ramble ウィーンから愛をこめて…………

タクミは、13歳の時の夢を見ていた。

「兄さん！今日は、ハロウィーンだね！！」
まだ、小学6年生の千夏がこっちにくる。

両羽家では、大抵両親が不在なため俺がほとんど家事をしていた。

「ああ、そうだな。だから、今日はカボチャメインの食事にしてやる。」

その日がたまたま休日だったために俺は、一日中かけて仕込みをしようとして計画を練っていたのだ。

「楽しみだな〜〜」

「おお任せておけ」

俺は、そうして仕込みをするために材料を切ることにした。

「兄さん。今…………朝だよ…………お腹すいたよ〜〜」

「ああ…………忘れてた」

「兄さん時々そういうの抜けているからダメなんだよ！」

「ごめんごめん」

俺自身、何となく楽しみにしていた。
親父たちがケチなために、こういう日しか、豪華な料理を作れなかったのだ。
時々思う。

中学一年生が考える事じゃないよな……

「兄さん〜まだー！ー！ー！」

「ああ、ごめん。ごめん」

すぐに朝ごはんを作った。

「「いただきます」」

二人の声が家の中から聞こえる。

「どうだ！？」

今日は、ベーコンエッグを作ってみた。

「うん。いつも通り！」

「そうか……」

作った俺からしてみるといつも通りというのが褒めているのかよくわからない。

「でも、お父さん達何してるんだろう……」

「さあ???今はどこにいるんだっけ?」

二人とも何でか知らないけど忙しい。

母さんは、映画の収録で忙しいのだろうが、親父が忙しいのは分からない。

ただ単に、一緒にいたいだけなのかもな……

「今は、確かヨーロッパのどこかにいるはずだよ」

「ヨーロッパか……」

二人ともロケ地になる場所にいろいろと言っているために、消息がつかみにくい。

「よし、気を取り直して夕飯作るか!」

「うん、楽しみにしている」

妹の笑顔がまぶしくてやる気になった。

・
しかし、何で数年もしないうちに性格が変わったのだろうか……

今世紀最大の謎だ。

昼は、適当にカップラーメンを食べただけだ。

「この、チキンカレー味おいしいね!!」

「本当か……辛いだけなんだが…味が辛いつていつもの」

「これが、おいしいんだよ!」

「そうなのか」

妹との味覚の違いが分かった。

「チキンがカレーなんてダメだろ」

「兄さんつまらない……」

『ぐさっ』

カレーと辛れいをかけたのがつまらないと言われたのがショックだ。渾身の出来だったのに。

食べ終わり。

また、作り始める。

そして、仕込みをしていたら。

あっという間に夕方になっていた。

「兄さん…本当にできるの??」

「ああ大丈夫だ!!」

しっかりと、豪華な食事になると思う。

『ピンポーン』

ドアホンの音が聞こえる。

「私出てくるね。」

千夏が走って行き、ドアを開けると

「こんにちは、ウルフ宅急便です。お荷物をお届けに参りました。
両羽 巧様で会っていますか」

「はい」

「こちらにサインを」

……。

…。

「ありがとうございます。」

ドアが閉まる音が聞こえ、箱を持った千夏がこっちに来た。

「兄さん。お父さんとお母さんからだよ」

「へえ〜〜珍しいな。やっぱりハロウィーンだからかな？」

正方形の中ぐらいの箱を持っている。

「ご飯で来たから、食べたら。開けてみるか？」

「うん」

そうして、夕食が始まった。

「わあ〜〜〜おいしいそう。」

「どうだ！」

ちょっと作りすぎた気がするが……いや、作りすぎだ。

これで当分、夕食を作らなくてもすむ。

その後、食べて食べて食べたが……会話は全くない。

「」「ごちそうさま!」「」

「おいしかった」

「お粗末様です」

やっぱり、かなりの量が残ってしまった。

「それでは、開けてみよう!」

そういったとともに千夏が開け始めた。

「これは……ビデオとカボチャだな」

開けると、カボチャの中にビデオが入っていた。

「ハロウィーンと言えばそうだね。とにかくビデオ見てみよ!」

「ああわかった。」

ビデオデッキの中にいれて再生ボタンを押す。

背景がレンガで作られた家などが写っている。
その前には、

「ああ、お母さんとお父さん!」

母さんと親父が写っていた。

「わはっはは、元気が、わが息子娘たちよ」

マッスルで、元気120%のいつも通りの親父が写る。

「今、俺たちは、オーストリアにいる。」

オーストリアと言えば、音楽と芸術の都があるな。

「へえ〜〜オーストラ≫リアにいるんだ。」

「千夏……“ラ”はいらないぞ」

千夏が真っ赤になり。

「間違えは誰にだってあるよ」

言い訳をする。

「Hey! 巧に千夏。元気にしてる!」

元気で活発な声であいさつしてくるのは、母さんだ。

「それで、今私たちがいる場所わかる??」

「いや、オーストリアだろ!」

つい、ビデオレターに突っ込んでしまった。

「巧！オーストリアだろっていう突っ込みはつまらんぞ」

「えっ。俺の突っ込みが読まれた！！」

「巧は、相変わらず。父さんには勝てないわね。正解を言ってあげて。」

「それはだな」

少し間を作って。

「ハローーウィーンにいるぞ！！俺達は！！！」

「え……………」

これは、寒い。

「兄さんまさか……」

千夏も気づいたようだ。

「どうだ。父さん渾身のギャグは、ハロウィーンの日“ハローウィーン”にいるぞ。がはっはは」

笑い声が響く。

「さすが、笑いのツボ押さえてる。クスクス」

母さんまで一緒に笑っていた。

「それでは、また!!」

そうして、ビデオが終わった。

「何がしたかったんだ……二人とも……」

「さあ……?」

ていうか、親父と同じことをした俺は……

はずかしい!!

両羽家のハロウィンは、こうして幕を閉じた。

「タクミさん起きてください!!」

エリスの大声でタクミは起きた。

「エリスなんだ??」

「いや、だって何か無気力そうで死にかけた顔をしてたから」

「確かに……」

夢を思い出す。

「それでどうしたんですか??」

「寒いハロウィーンを過ごしたのさ」

「何ですか??」

「気にしなくていい」

懐かしく思い出したくない夢を見た。

R a m b l e ウィーンから愛をこめて……………（後書き）

今後も過去編があるかもしれないので期待してください。

話の途中でこの話を急に持ってきてすみません。

第十一話「これから、新しく仲間になったフェンリルだ。」

「まさか……魔王!？」

タクミがオオカミを見てあの声が聞こえたために魔王だといことがわかったが、エリスにはどうやらあの頭に響く声は聞こえないらしい。

「タクミさんどうしたんですか……?このオオカミさん……」

エリスは、少し体が震えている。

そして、タクミの後ろに下がって行った。

(おおお!!!エリス!より一層可愛くなってお母さんに似てきたな!)

またもや、タクミの頭の中に響く。

「魔王!!!どうことだ!これは!？」

タクミが痺れを切らして大声で言ったのはいいのだが

「え!!!魔王ってお父様なんですか!？」

エリスがすぐさま反応する。

(お前わしは魔王ではない!!!ただの狼だ。それにエリスには私の正体を知られたくないから黙っててくれないか???)

タクミは、そばに近づき耳元で話す。

「……何でだよ!？」

(理由はいいから、わしの名前はフェンリルだとも言っておけ!)

「ああ、もうわかったよ！」

「タクミさんどうしたんですか…？」

エリスが懐疑的な視線でこちらを見る。

「あはは、いやゝ忘れてたよ。魔剣と一緒に仲間になった。魔狼のフェンリルだ。」

タクミが堂々と嘘を言う。

それに乗ったフェンリルは

「ワンワン」

尻尾を震わせている。

「まったく、ワンワンって犬かよ。まったく魔王の威厳もなくそもないな。」

小声で嘆く。

「そうなんですか！よろしくねフェンリル！！」

エリスの目を輝かせて、フェンリルに向かって走って飛びつき抱きしめた。

「よく見たら可愛いかも〜！」

「ワン！ワン！ワオオオーーーーー！」

なんかフェンリルも喜んでいる。

「はぁーーーー。本当に魔王なんかこいつ……」

親子のスキンシップなのだが・・・

とタクミは内心嘆く。勝手にやっててくれとタクミは思った。

「エリス。今日、ここで野営をするからみんなに伝えてくれ」

「はい、わかりました」

エリスは、タクミの言葉を聞いてテクテクと駆け足で軍のみんなに

伝えに行った。

タクミがフェンリルの方を見る。

「これは、どういうことだ？」

（そのままの意味だが）

やはり、頭の中に響く。

「この声は、俺にしか聞こえていなようだが何でだ??」

（それはだな…わしは、さっき言ったように肉体はないが魂は残っていた。それで今まで魔剣に縛られてたからな）

「縛られる??」

タクミは聞きなれない言葉に首をかしげる。

（魔剣というのは、意志がある。わしは、あまりにも魔剣に好かれてしまつて、死なせてくれなかったは!!がはは）

オオカミ自体は、息が淡いのだがタクミの頭の中には笑い声が響いて少し不愉快に感じる。

「事情は、わかった。それで、お前もついてくるのか??」

（もちろんだとも）

「そうかよ……どうせダメと言つてもついてくるのだろ!??」

（もちろん!!）

タクミは、ため息をつきながらフェンリルと一緒にエリスのもとへと歩いて行った。

そしてエリスの前に行き。

「これから、新しく仲間になったフェンリルだ。」

「ワンワン」

そういつて、フェンリルを紹介した。

一方の人族は……

「ゴルバ様、増援部隊が到着いたしました。」

「うむそうか。これで魔王軍を粉砕できるわ！！がっはは！！」
机を叩きながら豪快に笑っている。

そして、その横に控えていたグスバルもかすかに笑っていた。
そうして、人族は魔族への再戦へと意気込むのであった。

「ブリュンヒルドだっけ？こんなにも兵隊をくれるの？」

千夏は、陣織の中でブリュンヒルドに訪ねる。

「そうです。しかし、千夏様先ほど通りかかった部隊も魔王軍の所へ向かっていたようでしたがよかったのですか？」

兵力はざっと3千。

ブリュンヒルドが言っていたことは、ゴルバの部隊がちょうど横を通って進軍していったことだ。

進軍中の一人の兵に聞いてみればこれから魔王軍の所へ行くと聞けばなおさら部隊を徴集すればより多くの兵力になったからだ。

「たぶん、指揮系統がバラバラになって自滅すると思うからそれなら別々で行動したほうがいいからね。」

千夏は、はっきり堂々と返答。

「それなら、よろしいのですが……」

ブリュンヒルドは、不満そうな顔になる。

「それより、私の部下这件事情でいいのね？」

「はい、オーディン様がそうおっしゃったので……」

「そう……」

千夏は、このブリュンヒルドを信用できなかった。

千夏自体、オーディンと神族を信用していなかったが兄貴を連れ戻せれるというのがあったためにこの状況に乗ったのだ。

「まずは、魔王軍の実力がどれくらいなのか調べてみないと……」

「この戦い、魔王軍が勝つとでも」

ブリュンヒルドは、口をとがらせて言った。

「たぶんね。直感で感じるの……」

千夏は、自分の中で一番信頼が出来るのは知識でも友でもなく直観だと思っている。

あと、兄貴も……

「いや、違う……」

「どうしたんですか!？」

「何でもない。何でも……」

千夏は一瞬、信頼できるのが兄貴と思い浮かんだのを慌てて否定したのだ。

「そうですか……」

ブリュンヒルドは、渋々頷いたのだ。

「それでは、兄貴の腕前を拝見しましょうか……」

千夏は、これから戦場になる辺りを見て言った。

第十二話「ある意味、指揮官に向いているな」

魔王軍一行は、一晩明けて新しく合流した部隊との再編成を行っていた。

「こんなもんでいいんじゃないか？」

タクミが、リザードDジョージから編成の説明を受けて納得していた。

「エリス？ いいよな？」

「はい、いいんじゃないですか？」

頭にはてなマークが浮かんで首をかしげている。

「何で、首をかしげているんだよ。いちおう魔王軍の長おさだろ！」

エリスは、真実を言いたくないような顔をする。

そこで、リザードDジョージが答える。

「それは、今まで私が指揮をしていたのです。」

「それって、指揮していなかったのか今まで…？」

タクミがエリスの方を見るとエリスはあたふたして

「だって、今まで軍隊を指揮の仕方なんて勉強していなかったし…
…それに…それに！」

エリスは、それに、を連呼する。

「いや、エリス様は支えてとなっております。」

リザードDジョージがフォローをする。

「そうなんですよ！ 私は考えるのが苦手なんです。だから、だから
ジョージさんに任せてたんです！」

子犬のように叫ぶ。

タクミは、リザードDジョージを呼んで小声で話す。

「本当なのか？」

「本当です……エリス様は魔族の皆から守りたくなる存在らしいです。私もそうなんです。そのために、今残っているのは、エリス様をお慕いして守りたい根性がバリバリある奴らばかりなんですよ」

「ある意味、指揮官に向いているな」

リザードDジョージが大きくうなづく

「そうなんです。」

「エリスの才能だな、守りたくさせるようなのは」

「まったくもって」二

人が目の前でこそそと密談しているのが気になったエリスが大きな声で

「二人とも何しているんですか！！」

その声に、二人はビクツとして振り向いた。

「エリス様、これは必要事項を確認していたのです。」

二人は慌てて取ってつけたような言い訳をする。

「そうだ！エリス。必要なことだったんだ！」

タクミの中では本当に必要なことだった。

何でエリスの元に魔族がついていくのか不思議だったからだ。今回の話を聞いて納得してエリスの仁徳に感心した。

「そうなんですか……どうせ私はいつも邪魔者ですよ。だ。・・・
ぶつぶつ」

エリスが自己嫌悪しているのを見かねたタクミは、フォローを入れることにする。

「大丈夫だ。お前は立派な指揮官だ!!……………ある意味……………
しまった口が滑った。」

「ある意味って……ひどいすぎです」

エリスの目頭に水がたまっている。
もうすぐで決壊しそうだった。

タクミがやばいと思っていた瞬間。

「ガブツ」

「いった~~~~~」

タクミの腕を突然かまれ何ともいえない痛さを感じた。

「誰だ……ってフェンリルか!!」

腕をかんでいるのはフェンリルだった。

（おのれ~~~~貴様!わしの娘を泣かせるとは不屈き者め!やはり
亡き者しておくべきか!?ああ!）

「急にキレるな!泣かせていないだろ!!」

（問答無用!!）

さらに飛びつこうとしたのだが

「この野郎!調子に乗って!!」

タクミがフェンリルを振り払う。

二人は睨めあつて距離をとる。

「ガルル！」

「やってやる！」

二人の目線で火柱が立っていると、

「あはは、二人とも面白い」

急に隣で笑い出したのはエリスだった。

「タクミさんも犬みたい…クスクス」

お腹を抱えながら笑っている。

そんな笑っているエリスを見て二人ともケンカをするのをやめた。

そして眺めている。

楽しそうに笑っているエリスを・・・

「たつく、誰のためにやってると思ってるんだ！」

タクミは、内心ぼやいた。

二人と一匹のほほえましい光景に突然釘を刺された。

「大変です。人族が来ました。兵力はおよそ2000後半です!!」

そいつは、息を切らしていた。

「そうか……もう来たか…この先に開けた土地でもあるか？」

「はい！ちょうど、そこで敵は陣を引いています。」

「タクミさん、そこって出口ですよ。そこを通らないといけません。」
「」
エリスが慌てる。

「たぶん、俺たちの場所を特定されて先回りされたな：とりあえず、抜けるにはそいつらを叩かないといけないから全軍進軍するぞ！」
タクミの言葉と共に全軍が陣形を立て直す。

その合間にエリスはタクミに訪ねる。
あいま

「タクミさん大丈夫なんですか!？」

「ああ任せておけ!」

陣形を整える。進んでいる途中

タクミはフェンリルに近寄り話しかける。

「ダーインスレイブってどう使えるんだ？」

（ダーインスレイブが答えてくれるだろう。ただし、“20%”ぐらいの力にしておけ）

20を強調させる。

「何で20なんだ？」

（100で打つと世界が持たない。）

「まじでか!」

タクミは驚愕の事実にはビビり、とんでもない剣を手に入れたんだな
と思った。

「なるほど：それなら単純な作戦で行くか!」

（わしは、口出しはしないがエリスを守るためなら何でもする。）
「期待しないでおくよ!」

タクミは、作戦を考えた。進んでいくとひけた場所に出る。

そこには、人族の部隊が横長く展開していた。

「俺たちを通さない気だな。」

「どうするんですが、中央突破にするんですか？」

エリスは今回の状況の打開策が浮かばなかったのでタクミに託す。

「そうすると、囲まれてあつという間にやられるな、前に俺たちが取った作戦と似ているな」

「どうするんですか!？」

「大丈夫だつて」

タクミは、余裕の顔をする。

「そうですか…」

エリスは、タクミのそんな顔を見て安心するのだ。

「何かタクミさんって、不思議だな」

自分に向かってささやいているエリスであった。

第十二話「ある意味、指揮官に向いているな」(後書き)

感想・評価など待っています。

第十三話「さて、こいつを試しに使って見ますか！」

「魔王軍。現れました。数は、およそ2000！前の戦いより増えています。」

今度も若い偵察兵だったのだが前の顔とは違っていた。

「そうか、あの森に隠れていた兵力と合流したのか……お前は、優秀だな！お前の前任がどうなったかは聞いておるだろうがそうならないようにがばってくれ！！」

「は、はい！！」

逃げるようにして去って行った。

前の戦いで偵察に出ていた兵は、戦闘終了後一晩建ったら謎の死に方をしたらしい。

噂には毒薬で殺されたと言われている。

理由は簡単でしっかりと敵の配置などを調べなかったからだろう。今回の偵察兵たちは必死なのだ。

そして、ゴルバを恐れていた。

偵察兵以外にも怖がっている兵はたくさんいた。

ゴルバは、そんな事には気づいていなかった。

「これで、魔王軍の命もつきたたわい。ぐはあは！！」

兵たちの心情も知らないで、陣内で大笑いしていた。

「ゴルバ様、これならいけます。今度こそ魔王軍の奴らを亡き者にできましょう。」

グスバルは、ゴルバの事をほめていた。

しかし、袖に隠れている手が震えていた。
内心では悔しのだ。

こんな野蛮な奴に俺が負けるとはそんなことを内心で考えてゴルバに向かつて同意をしていた。

「千夏様！危険です。」

「大丈夫だって！」

千夏とブリュンヒルドは、両軍が見渡せる位置にある山の上から見ていた。

「心配すぎ！たぶん両軍ともに伏兵なんていないでしょうし」

「どうしてそんなことが？」

千夏が当然かのように言っただけで、ため何でそんなことがいるのか不思議だった。

「両軍ともに伏兵に裂ける兵力なんてないだろうし、兄貴も今回は伏兵に回す時間なんかなかったから。」

「そうですか……ですが、護衛の兵も連れてこずに二人だけでここまで来るのは少々危険なのではないでしょうか……」

周りには、木が生い茂っており、ちょうどここだけが日の光を浴びれる場所だった。

そこには千夏とブリュンヒルドしかいなく千夏は双眼鏡的な物で状況を確認している。

「心配しすぎ。私とあなたが戦えば100人ぐらいは簡単に倒せるでしょうし」

「その通りですが……」

その100人という言葉には、何にも疑問を持たなかった。

ブリュンヒルドで本人もそれぐらいはいけるだろうと自負しているからだ。

「それにここなら……」

千夏がそつと呟きそうになった。

「何ですか!？」

ブリュンヒルドは、うまく聞き取れなかったために聞きかえしたが

「何でもない。」

千夏は誤魔化したのだ。

千夏の心の中では、もし負けてバカ兄貴が死にそうになっても助けに行けられる位置としてこの場所を陣取ったのだがそれは、心の奥隅へと隠した。

千夏は、心配そうにでも真剣にそんなような複雑な心境で戦場を見ていたのだ。

魔王軍がゴルバの部隊と対峙した。

陣形は、相手とまったく同じだった。

距離的には、弓をつつたらギリギリ届かない絶妙な位置にいる。

「どうしますか??？」

エリスは、先ほどからこの言葉を何分かおきにはタクミに聞いている。

「さっきから、そればかりだな！」

いい加減うつとうしいく感じられたのかエリスに向かって言う。

「だって、だって、心配なんです！絶対絶命じゃないですか！これからどうするんですかー！」

「ねちねち、ねちねち、うるさいなエリス」

「そりゃあ、こんな状況じゃうるさくもなりますって！」

子犬と猿が言い争いしているようだった。

「お二人とも静かにしてください。わが軍の士気を悪くするかもしれません。」

リザードD^{ジョージ}が突っ込む。

「すいません」

エリスは小さくなったように、しゅんとなる。

それを見たりザードD^{ジョージ}は慌てて

「いや、エリス様は悪くないんです。このへたれ勇者が悪いのです。」

「このへたれだと！お前：言ってもいいことと悪いことがあるぞ！」

口をとがらせてタクミは怒る。

「二人とも落ち着いて」

何やら先ほどの風景とはガラッと立場が変わったみたいだ。

エリスが子犬のように震えていると

そこに

（タクミー！わしの娘を泣かせるなー！）

「ガルウー―」

いつの間にやらフェンリルがいた。

「何だ！？このクソ狼が！！」

そう言うフェンリルがとびかかり

「ガブッ」

「痛い、痛いつてギブギブ、ってか冗談抜きに痛い！！」
かまれている腕を必死に上下させながらタクミは叫んだ。

（これで懲りたか！）

そう言うフェンリルはまたどこかいつてしまった。

「たつく、なんであいつは、エリスを泣かせると会われるんだよ
！」

タクミは、かまれた腕をさすりながら言った。

「やっと落ち着きましたか…」

「誰のせいだと思ってるんだ！！」

「ひゃうう！」

タクミの大きな声にビクツとするエリス。

（お前：懲りてないようだな……）

タクミは、瞬間的に殺気を感じ取る。

その方に振り向くと目を光らせている動物がいた。

「エリス、大丈夫だ！俺に策があるから！」

怖くなって慌てて、そういつて取り繕うに言い。

ダインスレイブを取り出した。

「さて、こいつを試しに使って見ますか！」

剣を抜いてダーインスレイブの全貌が見える。

紫色みたいな色に、中心は黒色の線が入っている。

デザインは実にシンプルで宝石みたいなものは一切なかった。

「これが……ダーインスレイブ……」

エリスは口をポカッと開けていた。

「さあ、行くぜダーインスレイブ。」

そうして、タクミはダーインスレイブを構えた。

第十四話「私が魔王に…あなたが勇者に…」

タクミは、ダーインスレイブを肩におき、歩き始める。

「ちょ、ちよつとタクミさん！魔剣を使うんですか！？」

「ああ、もちろん」

タクミは歩きながら返事をする。

元々、ダーインスレイブを使うことを前提にして作戦を考えていた。とはいっても、作戦は単純で、ダーインスレイブによるかく乱し、そしてそのまま一斉に突撃させるという作戦だ。

作戦としては物足りないだろうがシンプルこそいい時もある。実際の所それぐらいしか活路を見いだせないと思っっているタクミがエリスに返事をし。前に歩き出す。

そうすると何事かと魔族の兵たちはこちらを見てくる。

魔族の兵たちはよく見覚えのある剣を見て固まる。

それはそのはず、以前魔王が持っていた魔剣なのだから。

そして、その剣で何度も戦場を一変させてきたことを知っているからだ。

今、彼らの前には魔剣を持って現れたタクミに釘づけになる。

「ほんまにあんな男がああ剣をもってはるのか……」

そのちよつと横には、ゴブリンA^{ジョン}じつとタクミの方を見ている。

「いや、魔剣一つ持っただけでここまで様になるとは、さすがでっかな！！」

棍棒を片手に持ちながら言う。

そして、去っていくまで視線を離せなかった。

「ああ！！タクミさん！」
骨子がいた。

どんどんタクミは進んでいった。

タクミの進んでいる先は、誰もいなかった。

魔族たちはどういていたのだ。

その姿に魅せられていた。
かつて、自分たちの窮地を救ってくれた魔王と重ねていたのだ。
タクミが、エリスによって勇者として召喚させられた事を知っている人は少ない。

だから、魔王がまた再来したのかと思っている。
その姿に嬉しくて震えているのだ。
今まで魔王が死んでから、負ける一方だった。
この戦いは自分たちで終わるのか…
そんな気持ちでいっぱいだったのだが、ここに現れた一人の男に期待をしていた。

そう……魔王が現れたのだと。

タクミは、兵たちの一番前までくる。

そして、ダークインスレイブを持つ。

「タクミさん……なんだかつこいいです。」

エリスの気持ちは高ぶっていた。

そして、顔が熱くなつて赤くなるのを感じた。

それがどのような心情でそうだったのかはエリスにはわからなかった。

「タクミ殿が昔の魔王様みたいに見えましたよ……」

リザードD^{ジョーシ}は、懐かしむような顔をする。

「やっぱり、勇者じゃなくて魔王なのでは??」

リザードD^{ジョーシ}がエリスに言う。

「いえ、確かに勇者を呼びましたよ！ 私たち魔王軍の勇者を……」

エリス自身勇者とか魔王の定義なんて考えたことがなかった。

魔王とは……一般的な解釈では人に災いを与えたり、悪の道に陥れたりするのが常識なんだろうが。

エリス達魔族からして見れば救世主的な意味合いを持っている。

人は魔族を偏見し悪い奴なのだと決めつけている。

そして、それを迫害して追い出している。

実際に今までの戦いも土地を守る戦いなどが多くてそのために戦っていた。

だからと言って人族が全部悪いわけではない。

人族もいつかはここも取られるんじゃないかという恐怖に蝕むさまれて
いる。

そうして、戦いは起こるのだ。

戦争なんて言うのはやらないのが一番だと思っただがそれでも起きて
しまう。

最初はどんな小さな喧嘩でもそれがやがて国、種族を巻き込んでし
まう。

言ってしまうえば国同士の喧嘩なのだ。

主義主張を旗印に戦っている。

決して頑固だからとかそんなのではない。

ただ、自分の意見を通すそんな簡単なことで戦争は起きている。

止める事なんてできないのだ。

そうして起きる戦争の中で英雄と呼ばれている人たちが出てくる。

それと同じように魔族の中では、魔王が英雄なのだ。

だから、勇者と魔王は根本的に意味は同じなのかもしれない。

ただ、敵味方の違いだけなのかもしれない。

そう感じているのだエリスは……

「タクミ殿は、魔王軍の勇者ですか……それなら、エリス様には魔王になつてもらわないと……」

リザードDがエリスに向かって優しく語りかける。

「私が魔王に??」

「そうです。私たち魔王軍の救世主となるべくお方なのです。エリス様は」

「私なんかが務まるわけじゃないじゃないですか……」

エリスは、下を向きつつ袖をつかんでじっと黙っていた。

「エリスが軍を引っ張っていけ、そして俺がお前の頭となって引っ張ってやるから心配するな。」

タクミが前に言った言葉を思い出した。

「私の頭になつて……引っ張ってやるか……」

そんなことを思い出して小声で一言つぶやいた。

そして、自分に向かってささやいた。

「私が魔王に……あなたが勇者に……」

エリスは、私が魔王という救世主になって、タクミが魔王軍の英雄という勇者になって、この世界をよりよくしたいと思った。

それは、エリスにとって初めての願いなのかもしれない。

エリスは、タクミと会った当時は戦争なんて嫌いでみんなで平和な場所ですらしていけばいいと思っていたが、

現実はそのなに甘くないことをこの数日で思い知った。

逃げても逃げても追ってくる人族の人達・・・

そして、逃げて行った魔族の人達・・・

いろいろなことを感じた、いや、こんなことはほんの少しなのかもしれない。

だから、エリスはもっと世界を見たいと思った。

魔王として・・・

「ジョージさん…私は、魔王になります。みんな……魔族とそして人族の魔王……救世主になって見せますよ!!」

「そのお言葉をお待ちしておりました。」

リザードDが畏まるようにして臣下の礼をする。

（ようやく、決意してくれたか……わが娘よ……いや、魔王!）

フェンリルは娘の言葉を聞いて安心したがどこかさみしくなった。

新たに決意をしたエリスと、

嬉しく思うリザード^{ジョージ}Dと、

さびしく思うフェンリルと

三者違う気持ちを抱えているが

三人ともタクミの雄姿を眺めている。

第十五話「あれっ!？」

タクミが、魔王軍の最前列まで来る。

「さて、このダインスレイブの力を見させえ貰いますか!！」
ダインスレイブを構える。

そうするとタクミの中に何とも言えない力が流れ込んでくる。

「使い方がわかる……」

頭の中に流れ込んできたのだ。

使い方などが一瞬でわかる。

そして、力をためていく。

ちよつとずつちよつとずつ……。

そうでもない、力が暴発してしまいそうなほどの魔力が流れ込んでくる。

タクミ自身、魔法なんかは使ったことはないし。

それに魔力なんてものを感じたことがなかったのだがそれでもわかる。

これが魔力なのかと……

とっても不思議な力が流れ込んでくるのが。

タクミの額に汗が出てくる。

熱いからとかではなく。

手巾に出てくる汗だ。

ダインスレイブの制御にはものすごい集中力がある。

今でも、ダーインスレイブを持って立っているのがやっとなほどだ。体がふらつきかけるがじっと耐える。

「あの、魔王はこんなものを平気で操ってたのか……バケ者だな！」少し魔王の事を見直してみたりしている。

周りに少しずつ魔力が漏れ始め。

地面を押しつぶす。

タクミは耐えている。

今すぐにでも倒れたいのだがプライドが許さない。

やっぱり男なら一度ぐらいはこういう経験をしたことがあるんじゃないかな。

タクミはそう思った。

「もうそろそろかな……」

それは感覚的に分かったことだ。

タクミ自身は集中して気づいていなようだが。

周りは魔力によってどんどんへこんでいつている。

それを見ている魔王軍もちょっとずつは下がっているが。

それでも見とれていた。

人族の部隊も同じだった。

何かが始まるとわかっていても、動けないでいる。

戦場が一人の男に注目する。

そして、見ているうちに迫力が増していき。

轟音が戦場一帯に巻き散った。

そして、タクミは尻餅をついた。

「……………え…まさか…外した!？」

魔族は啞然としている。

驚きをあらわにしていた。

別の意味での驚きを…………。

タクミのダークインスレイブの魔法は、斜め上の山に直撃していた。

いや、元山だったところに…………

それを見た人族は、最前線にいた兵達が逃げ始めた。

それを見た真ん中にいた部隊なども逃げ始めた。

あるものは叫び。

あるものは武器や鎧をすてて。

走って逃げる。

部隊は自然消滅となった。

未だに何が起きたのかわからない。

魔王軍は、人族が逃げて行くのをただ眺めていただけだった。

「すごいな……ダーインスレイブ。」

タクミは、尻餅をついたまま笑った。
自分の姿がおかしくて笑ったのだ。
タクミが外しただけなのにそれを見て人族が逃げている姿が滑稽だった。

人族は恐怖のあまり逃げて、魔族は呆然眺めるという面白い風景で戦いは幕を閉じたのであった。

エリスは、タクミが外した瞬間に。

「やっぱり、タクミさんはタクミさんですね…ぷう！あはは！！」
お腹を抱えながら笑った。

「タクミ殿が外した……」

リザードDは、口を開けたままでいる。

（「はぁ〜」この先が心配だ……）

フェンリルはため息をついた。

「可笑^{おか}しい。タクミさんが外しましたよー！」

エリスは、明るい笑顔をする。

リザードDは、エリスのこんな笑顔を久々に見たために昔を思い出しながら微笑んでいた。

そうして、エリスは見事に外して帰ってくる勇者を待った。

「はぁ~~~~。バカ兄貴は、バカ兄貴ね」

千夏は木の上から一部始終を見た感想はたった一言だった。

魔王軍の中から出てきた兄貴はかつこいいと思ってしまったのだが、ふたを開けたらびっくりってな感じで見事に期待に応えてくれたという安心感に包まれた。

「……私ったら何を安心しているの？」
そう小声で自分につぶやいた。
そして

「撤退ね。ブリュンヒルド」

「しかし、今戦えばこちらに勝機があるのでは!？」

ブリュンヒルドは、千夏をにらみながら抗議したが。

その視線をまったく無視をし

「たぶん、兵力が同じだから最終的には士気で決まるところから。

無理ね!」

言いきった。

「しかし……千夏様にはエクスカリバーがあるではありませんか。」
「そんなのはあっちだって魔剣を持っているんだからお相子よ。」
「しかし!」

ブリュンヒルドは、内心焦っているような顔をしながら反対するが、
・
・

「撤退して、オーデインに増援を貰わないと。あと、ブリュンヒルド。この判断は私が独断でしたことだからあなたには関係ない。わかった！」

「それなら……いいでしょう……」

ブリュンヒルドは渋々頷いたのだ。

千夏は、ブリュンヒルドがオーデインの事を敬愛していることを見抜いて先ほどの言葉を言ったのだ。

自分に責任がないとわかれば意見に賛同するだろうと気づいた。

千夏たちの部隊は何事もなかったようにひっそりと撤退したのであった。

一方、人族の部隊は混沌に包まれていた。

「撤退するな！！あんなのはつたりだ！！」

ゴルバは大声で叫んでいるのだが、
ゴルバの恐怖よりもダーインスレイブの威力の恐怖の方が勝ったのだ。

「くそつたれ！！使えん兵ばかりだな！！」

ゴルバは、馬の準備をさせて撤退の準備にかかった。
この状況では、戦うことはできないだろうと思つての決断だ。

「あの力は……」

グスバルは、魔剣の力に魅了された。

そして、感謝もした。

これで自分の番が来ると思ってたからだ。

グスバルは、にやつきながら戦場から離れていく。

夕日がきれいな中でそれぞれの思惑を胸に宿したまま戦場から去って行った。

第十五話「あれっ!？」（後書き）

誤字脱字があつた知らせてください。

感想・評価待っています。

第十六話「俺が勇者になって、お前：魔王を助ける！！」

太陽が山に隠れようとした頃にタクミはエリス達のもとに帰ってきた。

「ただいま！」

手を振りながら戻ってきたので、
エリスも手を振りながら

「おかえりなさいー！！」

満面の笑みで返す。

「いやー俺の作戦通りだった。」

「あれが、作戦！？どう見てもコケて外したようにしか見えなかったんですけど……」

エリスは意地悪そうな視線でタクミを貶めようとした。
おとし

「まあ、最終的には敵が逃げてくれたんだし、結果オーライと言うことにしておきませんか……？」

手を頭の後ろに置き誤魔化すように早口で言う。

「タクミさんらしいと言えればいいのですけどね。」

エリスは、タクミの姿を見てそういった。

「タクミ殿これからどうするんですか？」

リザードDジョーシがタクミを助けるかのごとく口をはさんだ。

「ああ、そうだな…まずは二日ここで休憩だな！」

「ここですか？？人族の部隊に襲われる可能性はないのですか？
？」

リザード^{ジョー}Dは、心配そうな目で見てくるが

「たぶん、ダインスレイブの力に怖気づいて攻撃はしてこないだろう。」

「確かに……そうですね……タクミさんのおかげですよ……クスクス」
エリスは、口を手で押さえながら話している。
今にも吹き出しそうな勢いだった。

「お前……いつから俺に対して皮肉を言えるようになった!？」

「もちろん!魔王になってからです。」

タクミは、エリスが堂々とものを言ったことにも驚いたのだが、何より自分の事を魔王と言ったことにびっくりする。

「魔王……って、お前どうしたんだ!？」

タクミは、ここに来た時点でエリスが少し変わったことに気付いたのだが無視してきた。

しかし、今回の魔王発言でますます気になった。

「それはですね……私は魔王になる決意をしたんです。」

「魔王に!？」

「はい!」

タクミは、先ほどの言葉に耳を疑っていたのだが今回ははっきりと聞こえた。

私は魔王になると……

「なんで?？」

タクミは、出会った当初のエリスとは信じられない変貌ぶりだった。最初はただ、平和なところで暮らしたいと言っているだけだったのに今ではそんなことを言っていない。

「私には、夢があります。この世界を神族、魔族、人族関係なしに暮らせる。そんな世界を作ることです。そのために必要ならば私は魔王にだってなります。」

「お前から、世界を作るなんて聞けるなんて思いもよらなかったよ。でも。この先に待っているのは大変なことばかりかもしれないぞ!？」

タクミは、覚悟を確かめるために声を大きくしていった。

「大丈夫です。だから私は決意したのです。魔王になると……」

エリスのまっすぐとした視線を感じたタクミは、頷き。

「よし、わかった。それじゃあ、俺も勇者になってやるよ。お前の夢をかなえるための勇者に……」

「タクミさんが勇者ですか?頼りないですね。」

「うつせえ!お前こそ魔王なんかに向いてないわ!」

「何ですか……」

そしてどちらが先かわからないが笑い声が聞こえ始めた。二人して笑っている。

「俺が勇者になって、お前：魔王を助ける！！」
タクミ宣言する。

「はい、私も魔王になって世界を作るために頑張ります。だから、勇者さんは頑張ってて付いて来てください！」

「お前こそ、先にへこたれるなよ！」

「もちろん！」

エリスとタクミは、互いに握手をして、気持ちを確かめ合った。

こうして、一人の少女は、世界を平和で平等とするために魔王になることを決意し。

一人の少年はその魔王を守り世界をよりよくすると宣言したのだ。

こうして、魔王と勇者が手を組んだ。

太陽が隠れかけ暗くなりつつある夕暮れ時に世界をこの後灯していく大きな光りが出来た事を知る者は誰もいない。

その後暗くなり、今度は焚火の火で明るくなった。

（お前は調子に乗りすぎだ！）

タクミは一人草原に寝転んでいたところにフェンリルが来る。

「何だ〜フェンリル？」

（まったく、エリスが魔王になることを決意してくれたから今回の事は許してやる。）

「今回の事って何のことだ〜？」

タクミは、ダーインスレイブを使った疲れでへとへとだった。

（まあ、いい。それよりもダーインスレイブをもうちよつと使いこなさないと宝の持ち腐れだ。）

「うつせー」

タクミが寝転がっている横にオオカミが座っていると奇妙な光景だった。

（まあ、お前の気にすることでもないか。その内お前がしっかりと使えこなせる時が来るだろう。）

一言、意味深な言葉を残して去って行った。

タクミはフェンリルと別れた後にエリスに呼ばれた。

そしてエリスとタクミ、軍の隊長格の人たちが集まって今後について話し合うことになった。

「それで、これから、どうするんですか??」

エリスの第一声を発した。

なんともエリスらしい発言だなとタクミは思う。

タクミは一つ疑問が出てくる。

「そついや…ここんとこ忙しくて聞けなかったけど、魔王って元々領地持ってたのか?」

魔王は、あと一步で勝ちそうなところで負けたわけだからかなりの領地を持っているはずだと思ったタクミが聞く。

「はい、タクミさんには説明していなかったと思いますがこちら辺一帯はすべてお父様の領地だったんです。」

「なるほど……」

タクミは、少し間をおいて

「それじゃあ、魔王の旧領地はこの世界のどれくらいなんだ?」

「それは、五分の一です。その他にも魔族の領地はたくさんあるのですがお父様の領地は五分の一です。あと、タクミさんには言っていないことなんですけど、北の方は、もの凄い高い山があって行けないんです。だから、この土地は、山から南の事になりますね。」

ようするに、一つの大陸ではなく、北に高い山のある南の一部と言

うことだ。

まだまだ世界は広いんだなとタクミは思う。

「この土地の名前ってなんていうんだ？」

「ここを、トリオスと言います。」

「トリオスね……けど、世界はまだあるんだろ??」

別の世界からきたタクミからしてみればこちら辺り帯では小さいさ過ぎる。

「たぶん……」

「地理的な状況は分かったから、次に魔王軍の目指す目標が決まった。」

そのタクミの言葉に、魔族の隊長格の人たちがざわめきつく。

「なんですか??」

「まずは、旧魔王領の奪還だ!」

「なるほど、まずは、地盤固めてからですか？」

頭に電球が光ったエリスは納得する。

「そうだ。」

「でも、大丈夫なんでしょうか?最近では大分、人族が入って来ていますし、国境沿いの砦も頑丈ですよ……」

しおらしくなり言う。

「大丈夫だって!」

「何ですか?」

「そりゃあ」

タクミが時間を置き。

「始まり方でエピソードが見えてくるからだ」

「エピソード？」

エリスが首をかしげる。

「始まりが良ければだいたい、あとはうまくいくってもんだ！」

「そうですか？」

エリスは信じていないような感じで首をかしげて見せるが

「そうだ！」

タクミは言い切る。

次に魔王と勇者は、旧領地の奪還に乗り出した。

第一章 人物説明

人物説明です。

本文中に容姿、姿が詳しく書かれていなかったなので補足的に書きま
す。

（作者の力不足ですいません。）

両羽りょうは 巧たくみ

種族：異世界の人間

本作の主人公。

高校二年生で、本を読むのと料理するのが趣味。

二枚目と言うよりかは、三枚目に近い容姿。

身長、170前半。

体重、60前半

黒と茶色が混じった髪の毛

エリナによって召喚されて、勇者として頑張る。

魔剣ダインスレイブが武器。

エリス

種族：魔族？？（父は魔王だが、母は種族が不明。）

小動物系。魔王から過保護に育てられる。

身長、150前半

体重、不明

髪の毛が水色で肩より少し下までである。ますっぐしてなく、途中で跳ねたりしている。

魔王軍の司令官で魔王の娘。

タクミを召喚する。

両羽 りょうは 千夏 ちなつ

種族：異世界の人間

男勝りな性格。

タクミより一歳年下。

中学2年の夏に突然性格が変わる。

タクミは、いまだにそのことがわかっていない。

身長、160前半

体重、不明

タクミの髪の毛の色と似ていて、肩にかからない程度の短い髪の毛の長さ。

神族に協力している。

聖剣エクスカリバーが武器。

フエンリル

種族：動物？？

エリスを過保護なまでに可愛がっていた。
エリスのためなら何でもやるという親バカぶり。

身長、1.5メートル

体重、重い

毛の色は、黒とねずみ色でお腹部分が白い。

今は、魂のみ存在していて、狼に乗り移った。

オーデイン

種族：神族

ヴァルハラ宮殿に住んでいて、神族の中で一番偉い

身長、160前半

体重、不明

金色の髪の毛で腰辺りまで髪がある。

いろいろと謎が多い人物。

フレイヤ

種族：神族

神族の一番槍と言われている。

身長、160後半

体重、不明

赤色の髪の毛で、まっすぐとした長い髪の毛

いろいろと謎が多い人物。

ブリュンヒルド

種族：神族

オーディンの事を心から慕っている。

身長、160前半

体重、不明

髪の毛は金髪のロング

千夏の事を快く思っていない。

ゴルバ

種族：人族

勇猛果敢で直観がするどい、ただしたびたび上官の命令を聞かないため昇格できずにいる。

身長、160後半

体重、80前半

髪の毛はない。

グスバル

種族：人族

若い士官。

自分の知略を自負して過信しすぎるがために負けることが多い。顔のおでこあたりに手を置くのがクセ。

身長、180前半

体重、60後半

銀髪の髪の毛で方ぐらいまで長さがある。

主要人物はこんな所ですね。

次は、意外に出番があつたキャラ。

ジェンじい

種族：魔族

リッチ 一番古参の重臣。エリスの魔法の先生でもある。

ジョン

種族：魔族

ゴブリンA 下っ端 大阪弁らしく話す。

ジョージ

種族：魔族

リザードD 指揮官 参謀役を務める。

骨子

種族：魔族

スケルトンB よくバラバラになる。

魔族の兵の種類。

ゴブリン・・・武器が棍棒か弓

スケルトン・・・防御力が最弱だが、何回でも蘇る

リザード・・・頭がいい

ウィッチ・・・攻撃魔法が使える。魔法ダメージ四分の一

リッチ・・・魔法全般が使える。魔法ダメージ四分の一

あとがき

みなさん初めまして、「魔王と勇者のタクティクス」を読んでくださったありがとうございます。

一章が終わりましたが、ハーレムになってないだろうと思っている方もいると思います。

徐々に増えていく予定です。いや、増えます！！

今後もしろしく願います。

誤字脱字、感想、評価待っています。

イラスト、レビュー等を書いてくれる方を募集しています。

第一話 「大丈夫だ。お前がいれば!!」

タクミが宣言してから一夜明けた昼過ぎに再度作戦会議が開かれることになった。

「それで、エリス。この辺の勢力図的なのを教えてくれ。」

「はい、まずはここの魔剣が眠る森があつて……」

エリスがこれから説明しようとしたときにタクミが口をはさむ。

「ちょっと待て、前から気になったんだが、魔剣の眠る森って名前がないのか?? 名前は??」

「それは……特に何もない深くて暗い森だったので特に名前なんてつけてませんでした。」

魔剣の眠る森の重要度の低さがわかる。

「それなら、ここの名前はダーインウッドで決定だな。」

「ダーインウッドですか……魔剣ダーインスレイブが眠っていた場所にぴったりでですね。」

エリスは、こくこくと頷き賛成する。

そして、エリスが続きを説明する。

「それですね。このダーインウッドより南にはいくつかの村があります。村といっても数百人は住む大きな場所もあれば数十人だけつてところもあります。」

タクミは頭の中で地図を作り出す。

ダーインウッドから南には複数の村があり。

数百人規模から数十人規模まで大きささまざまな村がある。

「そついえば：魔族って今どこにいるんだ??」

タクミが素朴で当たり前の質問をする。

「今は、山の奥に隠れて住んでいた。ここのダーインウッドにも結構の数が住んでいますよ。あとは人族と共存していますかね。」

「人族と共存??」

タクミは、ずっと魔族と人族が仲が悪いのかと思っていた。

「お父様が占領した土地の人族を追い出さなかったために複数の村では共存できていたんです。そして、少しずつ増えてきた矢先にお父様が殺されて。そして魔族が迫害を受けるようになったんです。」

「なるほどな。それならエリスは何をしたい?」

「何をしたい??」

タクミの急な支離滅裂な質問に首をかしげるエリス。

「ああ、お前がどんな風にしたいかってことだよ」

タクミのそんな質問にすぐに答える。

「もちろん。人族と魔族との共存です!」

タクミはにやつき。

その言葉を待ってましたかのような感じだ。

「それなら、俺たちがやることは一つだ。」

「一つ!??」

「人族の村を武力じゃなくて説得しに行くぞ!」
エリスが慌てた感じになる。

「説得ですか!?!無理ですよ!!!」

「大丈夫だ。お前がいれば!!!」

タクミが親指を立てて最大限にアピールする。

「ここら辺の人族の集落は、戦争が起きた後にできた村ばかりなんですよ!？」

エリスの言っていることも、事実だ。

「みんな、魔族が負けたがために逃げてきたりその戦争被害によって新たな場所を求めに来た人達ばかりなんですよ!」

「だからこそ意味がある。それで、エリスここら辺で一番でかい村はどこだ？」

「…むりだつて言ってるのに……」

自分の押しの弱さに後悔しつつ答えてしまつのが何ともエリスらしい。

「え〜とですね。たしかヘイモ村つてところが数百人規模で大きかったはずです。」

「よし、まずそこから説得だな。エリスと俺の二人だけで行くから魔王軍はここで待機だ。」

その言葉に驚いたのはエリスではなく。
リザード^{ジョーシ}Dだった。

「危険です。タクミ殿ならどこに行つてもいいですがエリス様は危険です。」

真っ先に反対する。

「俺はどうでもいいのかよ…」

タクミは、心が傷つくのだが反論する。

「なんでエリスはだめなんだ？」

「それは、魔王様として魔王軍の司令官でもあり。重要度の高いお方だからです。さらにタクミ殿はダーインスレイブを持っているか

「いいかもしれませんが、エリス様は何も持っていないません。」

「それは、エリスを甘やかしすぎだろ？それにエリスは魔法が使えるじゃないか？でも……そこまでへなちよこなら仕方ないか。それなら俺一人でもいく。」

タクミが挑発みたいな感じに言う。

エリスの目の前でタクミとリザードDジョージ勝手に言い争い。

さらにタクミのへなちよこ発言が気に食わなかったのか体をプルプルふるい始めて。

「タクミさん！やりますよ！説得やってみますよ！私の力をなめないでください！！」

「そうか！それは良かった。それじゃあ、俺とエリスはヘイモ村に説得に行くてくる。」

エリスの考えが改まらないうちにうちにさっさとで決定する。

リザードDジョージは、エリスが行くと言ったのでそれ以上反論する事が出来ずに渋々頷いたのだ。

「それじゃあ、明日に俺とエリスはヘイモ村に行くから。ここの指揮は、リザードDに任せる。解散！」

タクミの解散を合図にいろいろな人が立ち上がり去って行く。

そして、エリスとタクミも移動し始めて

「エリス本当にいいよな？」

タクミがねんのために聞く。

「もちろんです」

エリスがはつきりと答えた。

「それならいいや。」

夜を迎える。

タクミは一人草原を歩いていると、暗闇から突如としてオオカミが現れる。

「やっと来たか。」

（なんだわしのことをまっておったのか？）
でてきたのはフェンリルだった。

「ああもちろん。あんたに念を押して言うておきたくな。絶対に
ついてくるなよ！オオカミなんてついてこれば印象が最悪になるか
ら。」

（わかっておるわ）

フェンリルがオオカミのくせに澄ました顔をする。

「やけにあっさり認めるんだな」

タクミはこのあっさりした返答にちょっと拍子抜けした。

（エリスの成長は父親にとって嬉しいことだ。ただしわが娘に傷物
にしたら。ただで済むとは思うなよ！）

フェンリルの鋭い睨みに負けそうになるタクミは

「そ、そんなことするかよ！」

ちよっと怖気づいたように返答する。

（フン、せいぜい頑張ってこい！）

「おう。」

翌朝タクミとエリスは一路ヘイモ村へ向かうのであった。

第二話 「これって、動かせるのか？」

朝日のきれいな時間帯は過ぎ、暖かくなってきたころ二人はダーインウッドから一路ヘイモ村に向かうのであった。

「それじゃあ、行てきますね」

エリスが満面の笑みを浮かべ、不安そうな顔を見せていなかった。

エリスが不安な顔をしていなかったフェンリルは、草原に寝そべりながら遠目で二人の出発を見守る。

タクミもエリスの満面の笑みを見たために心配事はないと思い、気軽に旅ができる気持ちになった。

タクミは、無理やりいろいろなことをしているのではないかと言うことが心の重りになっていたのだ。

しかし、エリスの顔を見てほっと胸をなでおろすタクミと満面の笑みで手を振っているエリスの二人はやがて魔王軍から離れて見えなくなった。

リザードDは、心配しながら二人を見送った。

ダーインウッドの深い森を抜けていく。昼前にもかかわらず薄暗い。しかし、木と木の間からかすかに見え隠れする光の線たちが幻想的な世界を作り出していた。

「わあ〜きれい」

エリスが感嘆の息を漏らす。

「そうだな……」

タクミも歩いているがダーインウッドが作り出している光のアーチに酔いしれていた。

「こんなきれいな景色初めて見ましたよ。」

足は進んでいるのだが前を見て、下を見て、上を見てと目が忙しく動き回っている。

来るときは、ひたすら逃げてきたためにそんなことを見る余裕を二人から奪っていたのだ。

「私は、幼い時から城にこもっていることが多かったからこんな景色を見たのは本当に初めてです。」

二人が両手を使ってツルや木などをどけて歩いている時に突然エリスが話し出す。

「城にいたことが多かったのは何でだ？」

タクミは、エリスの話に乗ることにする。

「それは、お父様が中々外に行かしてくれなかったんです。それに外出できる時も何十人と周りに人がいて気がるなんていう雰囲気ではありませんでした。」

「あの、魔王ならやりかねん。」

タクミは小さな声でエリスに納得する。

「幼い時に風邪を引いたことがありました。その時のお父様は面白かったです。戦場からすぐに帰ってきて、寝込んでいる私を見るや医者はどこにいるー！薬はどこだー！と大げさに言って。しまいには、伝説の薬草を取りに行くとか言うしまつです。」

「魔王：親バカすぎるだろ！」

タクミが突っ込んだ時に草原の上に寝込んでいたフェンリルがくしやみをする。

（誰か私の噂か伝説について自慢しているのだろう。）
まさか、自分の赤裸々な過去を話されているとは思ってもしなかった。

「お父様が殺されてから、私はショックを受けたのですが、そんな暇もなく。一、二か月もしたら魔王城を攻められて逃げることになった。そこで初めて本当の外の世界を知ったのかもしれませんが。」
「本当の外の世界？」

タクミの疑問をこたえるかのように少し間を置き。

「私は、ずっと魔王上と言う鳥かごに住んでいるだけだったことを思い知らされました。そして、逃げて行く毎日を……」

「そんなに気にすることでもないぞ。これから見て行けばいいだけの事だし。俺もこっちに來たばかりだからエリスと同じだ。」
タクミは、親指をぐつと伸ばして前に出す。

「でも、私とタクミさんでは違うことがたくさんありますよ……」
「大丈夫だって、大丈夫！」

エリスが口を閉ざしたため会話がなく、やがて道に出る。

「ここが道か。意外にしっかりと整備されてるな。」

目の前の道はきれいではないのだが馬車が通れるくらいの広さは確保されており。

土がしっかりと踏み固めてあり雨が降った時なども泥濘ぬかるみが出来にくい道となっている。

「意外に、人も多いかもしれないぞ。」

「そうかもしれないね。」

二人は、そこから南南東の方角に歩き出す。

「あとどれくらいだ？ エリス？」

「たぶん、夕方辺りには着くかと思います。」

まだ、太陽が真上から少し落ちたぐらいの時間だった。

「それよりも、エリス。腹減った！」

タクミは、朝から何も食べずにお花がすいてきたころだった。

「タクミさん、あんな所に食べ物屋さんがありますよ？」

目を凝らしてよく見てみると何もない所にぽつんとお店みたいなのが開いていた。

「茶屋…さくら？」

「よし、茶屋なら早く行こうぜ！」

タクミが走って茶屋の所まで行く。

「いらつしゃいませ」

そこには、桜色のショートの髪で右上の所を桜の簪かんざしがついているエリスと同じくらいの背丈せたけの女の子が挨拶してきた。

さらに着物にエプロンをしている。

「こんにちは」

「どうも」

二人して外に置かれている長椅子に座る。

「ご注文は何にしましょう？」

そういつて紙がついている薄い板を渡してくる。

「何々……みたらし団子、みたらし団子、みたらし団子、もうみたらし団子しかないでしょ！って何でみたらし団子しかないんだよ！」
タクミが見たのは、みたらし団子と書かれていた。

「はい、家は、みたらし団子専門店です、後緑茶もありますよ？」
その子が笑顔で押し売りしてきたため

「わかったよ、みたらし団子四人前と緑茶を二つくれ。」

「まいど〜」

そういつて、中に入って行く。

数分した内に

「はい、みたらし団子四人前と緑茶二つ。」

お盆の上に二つの皿が置かれており六本ずつ置かれている。

「わぁ、甘くておいしいです。こんなの初めて食べましたよ!」

「そうか?」

エリスは、一本五つついているのをパクパクと食べている。

「それは、ありがとさん!お二人さん旅でもしているの?」

女の人が聞いてくる。

「ああ、そんな感じだな。それで名前は何ていうんだ?」

タクミは、魔王軍であることを知られたくないために誤魔化して話題を変える。

「ちよつと、お客さんナンパはやめてくださいよ」

手をひらひらさせてくる。

「そんなんじゃないって、俺の名前はタクミだ。」

二人が会話していることも無視してエリスは、みたらし団子に食らいついている。

「私の名前は、ヤエと言います。タクミさんですか。よろしく」

「ヤエ。よろしく!」

「…タクミ…タクミ…ううどこかで聞いたことあるような…」
ヤエが一人で呟いたのだが、タクミには聞こえなかった。

名前を聞いた後タクミも食べることに集中してすぐに食べ終わる。

「ふう〜ごちそうさま」

「ごちそうさまです!」

二人は、みたらし団子をきれいに食べて緑茶をすする。

「私は、エリスです。よろしくお願いします。ヤエさん」

「これはこれはエリスさんよろしく。」

そのまま雑談みたいな感じになる。

「お二人さんは、どこにいくんですかー?」

「ヘイモ村に行くんだよ」

「タクミさん」

エリスが横から言ってくるがタクミからしてみればたいした情報ではないと思っている。

「そうなんですか?それなら一緒に行きませんか?私もヘイモ村に行こうと思ってたところなん。」

「これって、動かせるのか?」

「このでかい、屋台を指さす。」

「はい、もちろん!」

ヤエは、笑って答えたのだ。

第二話 「これって、動かせるのか？」（後書き）

誤字脱字、感想と評価を待ってます。

第三話 「確かに…便利な茶屋だな。」

「ぐっ！……重い…」

タクミは、四つ輪の大きな荷車を動かしている。

「頑張ってくださいね。タクミさん」

「頑張って〜」

二人は、隣を歩いているのだが何も持っていない。

「あの、茶屋がこんな風になるとは想像以上だったよ……」

タクミは、茶屋の変貌をぶりを思い返す。

「まずはですね。ここに車輪を付けて」

引っかけてあった四つの車輪を持ち出してきて、端っこの方のでっぱり部分に着けいく。

「屋根をこうしてつと」

屋根と地面を支えている4本の木の棒を取ると屋根が折りたためるようになった。

そして、いい感じに車輪が地面に着き移動できるようになる。

「あとは、長椅子を…片づけてつと」

5、6人座れる長椅子を軽々しく持ちあげる。

そして、三個の長椅子を片付けていく。

「お終いつと、どうですか？これで運べるでしょ」

手をパンパンと叩きながらタクミの方を見る。

「確かに…便利な茶屋だな。」

タクミは、荷車へと早変わりした茶屋を見ながら感心する。

「これは、便利ですね〜。」

エリスも口を開けながら見ている。

「これが、家の自慢の茶屋、さくらや。」

ヤエは、茶屋から荷車に早変わりしたことを鼻高く言う。

「これなら、タクミさんたちと一緒に行けるでしょ？」

「確かにそうだな。向かう場所も同じだしエリスいいよな」

タクミは、元々付いて来ても何も問題はないことなのでエリスに訊ねる。

「いいと思いますよ。」

エリスが頷いて賛成する、

「と言うことでヤエ、一緒に行こう。」

「やったー。これで一人でさびしい思いなく、行けるー！」

ヤエがショートの髪を上下させながら喜んでいる。

「それじゃあ行きましょう。タクミさん。ヤエさん！」

「ああ」

タクミとエリスは、

歩き出そうとするとヤエがタクミに訴えかけるような目線で言う。

「タクミ…手伝ってくれませんか？」

ヤエが荷車を指さす。

「手伝うって？何を？」

タクミは、状況がなんとなくわかっていいるのだが聞き返してみる。

「本当はわかってるんですよ。この荷車を動かすの手伝ってくれませんか？」

もう一度荷車の方を指さす。

「いやー最近、筋肉痛がひどくて重いものもってはいけませんって、医者に言われてるんだよ。」

「私が、直してあげましょう。」

ヤエは、拳をピキピキ音を鳴らせてそして、手をぶらぶらとさせて準備運動を取る。

「すまん。俺が全面的に悪かったから許して。神様、仏様、ヤエ様
！！」

手を合わせてヤエの前に来る。

「手伝ってくださいすよね？」

ヤエがもう一度聞くと

「はい…わかりました……」

そうして、荷車を引っ張るのだが、

「うう、ううー重い！」

少しずつしか進んでいかない。

「タクミさん、頑張ってください。」

エリスが横から応援する。

「そう言うなら…お前も……手伝えよ！」

横で、必死に前に押していくのだが少ししか進まない。

エリスの歩くスピードの半分以下だった。

「タクミさんしっかりしないと、ほら進む進む。」

ヤエもなぜかエリスの横と一緒に進んでいる。

「ヤエ…何…で、手伝わないんだよ！」

ヤエがタクミに手伝ってほしいと言ったのに自分は全く何もしないでーと怒りたいのだが重くてそれどころではなかった。

「おいヤエ、いったい…何を入れたら……こんなに…重くなるんだ
??」

額に汗が流れ始めてやや下がり気味の太陽からの光が強烈にタクミを照らしている。

「それはですね。まず、みたらし団子を作るための白玉粉と上新粉に、あとタレになる醤油、砂糖とかの調味料。一番重いのは多分水

だね。」

「お前よく、今まで旅できていたな。」

「それは、あなたとは体の鍛え方が違いますから」
ヤエが胸を張って言う。

「ない胸はって…」

「タクミさん!!」

「聞き捨てなりませんね!!」

エリスとヤエが同時に怒り出す。

「…しまった。」

地雷を踏んでしまったとタクミは思った。

ヤエにだけ言ったつもりがまさかエリスにまで効果があったとは考えていなかった。

「ヤエさん！タクミさんなんてほっといていきましょ！」

「そうしよう。」

二人はらんらんスキップしながら先に進んでいく。

タクミは、一瞬この荷車を置いて行こうとしたがタクミの性格的にはそれもできず。

エリスとヤエを追いながら必死に荷車を引っ張って行く。

「…はあー…はあー… エリス…ヤエ… 少し休憩しないか？」

一時間頑張ったのだが、タクミの体力は限界に達していた。

「もう仕方ありませんね。休憩にしましょう。ヤエちゃんいいよね？」

「仕方ありませんがここは、休んでおきましょうエリスちゃん。」

二人は、止まりタクミと荷車が来るのを待つて、荷車の中にある長椅子を一戸取り出して三人が座る。

ヤエは、荷車から急須を取り出して、お湯を沸かして茶葉を急須の中に入れる。

お湯が暖まったところで急須の中にお湯を入れて数分過ぎ。

急須から湯呑茶碗にお茶を注ぐ。

「はい、どうぞ」

三人分の緑茶が出来上がる。

ズズーと二人はお茶をすすり。

エリスは、お茶をふーふーさせながら静かに飲む。

「休まるな」

タクミは、疲れて汗かいた後には温かい飲み物は無理だろと考えていたのだが意外に緑茶が飲めることを発見した。

「ヤエ、あの湯を沸かす道具何なんだ？」

ヤエが水を沸かすのに使ったのは、現代で言うアルコールランプを大きくしたようなものだった。

「これですか？」

分厚い辞書ほどの大きさのものを指さす。

「それだ。どうやって湯を沸かしているんだ？」

「それは、油を中に入れて、ひもをつるして染み込ませて燃やしているんです。少量の水ならこれを使った方が楽なんです。」

「そうなのか」

タクミの考えていた通りアルコールランプと同じ原理だった。

「ヤエちゃん、凄いの持つてるんですね。私そんなの見たことないですよ？」

「そんな、ほめても何も出てこないよ。」

「そういえば、二人ともいつからちゃん付けで呼び合うようになった

「たんだ？」

「それは、タクミさんがちんたらしていた時に話してたら気が合つて。さん付もいやだから、ちゃん付けにしたんです。」

エリスは、湯呑茶碗を、長椅子におく。

「そうなんですタクミさん！ねえエリスちゃん！」

何やら二人は意気投合している。

その後数分暖かい緑茶と涼しい風に当てられてゆったりとした時間を過ごした。

「そろそろ行くか」

タクミが、立ち上がり二人に聞く。

「そうですね。」

「行きましょ、行きましょ」

二人とも立ち上がり、ヤエは長椅子を片付ける。

「……それでなヤエ、変わってくれないか？」

長椅子を片付け、急須などをしまい終わると同時にタクミがヤエにお願いをする。

「手伝うって？何を？」

「ヤエさん……またまたご冗談がきついよ！」

ヤエは、ため息を一つつき。

「タクミさんじゃあ、一か月かかってもヘイモ村に着かないので変わってあげますよ。」

「……一か月って……まあいいや、ありがとうなヤエ！」

打ちのめされて心がズタズタになりそうだったが、瞬間的に切り替えることにしたタクミ。

「行きましょ！」

ヤエは、荷車を簡単に引いていく。

しかもタクミとエリスとの歩くスピードと同じだ。

「すごいな……」

タクミは、なぜだか負けたような気がして悔しい思いをした。

そして、エリスとタクミが歩き。

ヤエが軽々しく荷車を持つて歩き。

ヘイモ村へと向かうのであった。

第四話 「百聞は一見にしかずって言いますし。」

太陽が沈みかける中、三人は歩いている。

「ヤエって、ヘイモ村に行ったことあるんのか？」

荷車は、タクミとヤエの二人で押している。

しかし、ヤエのおかげで大分楽をさせてもらっている。

「ありますよ。こちら辺の村にはほとんど行ってますから。」

「すごいな。それで、ヘイモ村って。どんな感じなんだ？」

「人口は、数百人しか住んでいませんが、周りの村との交易が盛んなために結構人との出入りは激しいです。なので、宿とかそういう所を経営している人が多いですね。後は……いつて見ればわかるんじゃないですか？」

「いい加減だな」

「百聞は一見にしかずって言いますし。」

妙にその言葉に納得できたタクミだった。

会話が途切れて静かに前に進んでいく。

「まだ、つかないのか？」

日が暮れかけている時にタクミがヤエに聞く。

「タクミさんが遅いからです。タクミさんがもっと荷車の押すのを頑張ればよかったです。」

二人で、ガラガラと荷車を引いていく。

「それは、言わない約束だぞ。」

「本当ですタクミさんさえしっかりしていればいいのに」

「エリスまでひどいな！」

エリスまでタクミに悪口を言う。

二対一と完璧に不利な状況へと追い込まれるタクミ。

しかし、エリスの一言で急な終わりを告げる。

「ああ！光が見えてきましたよ！ほらあそこ！！」

エリスが斜め横の方を指す。

タクミ達も視線を向けると太陽が沈みかけているおかげもあって光がちらちらと見えている。

「本当だな！」

「エリスちゃん、さすが」

「よし、このまま日が沈まないうちに村にたどり着こう。」

タクミが荷車の押すスピードを上げ始める。

そして、太陽が沈んでいき光が良く見えてくる。

完璧に太陽が沈んだ時によやく、村の風景が見えてくる。

周りが柵で囲んであり、堀も掘られている。

「これを村っていうのか…どう見ても町にしか見えないんだが……」

タクミが少しスピードを落としてつつ町の風景を見ている。

「確かに、町だと思いますよ。」

エリスも外の風景に釘づけた。

「だから、言っただでしょ。百聞は一見にしかずだって」

ヤエが、自慢げに二人に言う。

タクミは、簡単にうなずくだけだ。

そして、三人は、門をくぐる。

「ヘイモ村に到着つと。」

門に入ると大きな路が出来ておりそこに様々な店や宿が立ち並んでいる。

「ヤエ、一回来たことあるならどこか宿ないか？」

荷車を人に当たらないように少しずつ動かしていく。

「それなら、家のオススメの宿屋うちがあります。こっちです。」

ヤエに付いて行く。

大路地から少し離れて小さな路に入つたところに宿屋があつた。

「ここです。ここ」

宿屋の前で止まる。

「少し待ってくださいね。」

ヤエが宿屋の中へと入って行く。

タクミとエリスは、荷車と共に待っていると扉を開けて出てくるヤエ。

「空いてました。この荷車をこっちに持っていきましょう」

荷車を裏側に回して表に戻り宿屋に入る。

「いらっしやいませ」

そこには、着物姿の女の人がいた。

「ようこそ。こちらへどうぞ」

着物の女の人に連れられて部屋に案内されている。

「ここです。」扉を開けてはいると8畳ぐらいの広さの部屋があつた。

そして、真ん中で区切れるようになってる。

「では、ごゆっくりどうぞ。」

「少し、せまいかな」

タクミが不満を漏らす

「ここら辺の宿は全てこれぐらいです。贅沢言わないでください。」

「そうなのか？」

「そうなんです。」

タクミは、必要最低限持つてきた荷物を置き座布団の上に座る。エリスもそれに真似て座る。

三人は、しばしの休憩をとったのちによるご飯を食べに出かける。

「なんで俺がおごらなきゃならないんだよ！」

タクミは、タクミとエリスの分とヤエの分を別々に払おうとしたのだがヤエが払わずに店を出て行ったためにタクミが払わされることになる。

「宿の案内とかしたんですから、そんな固いこと言わないでくださいよ…ね。」

そういつて、夕飯をたかられる。

そして、太陽が昇り次の日を迎えると

「宿代まで俺が払うのかよ！」

てつきり、前払いでヤエが払ってくれたと思っていたのだが違ったらしいタクミが払うことになっている。

「はあゝわかったよ」

結局タクミはヤエに宿代までたかられることになった。

「お金をたくさん持つてきて正解だった。」

タクミは、ヘイモ村に向かう前にリザード^{ジョーズ}かた結構の重さの袋を渡されている。

その中には、お金が入っていた。そして、このお金はどうしたのかとタクミが聞いてみると

「魔王上以外にあった宝石などをかき集めて売ったお金をダーインウッドに隠していたんです。だから、このお金を使って説得を成功させてくださいよ」

そう言われてリザードDジョージからもらったのだが。

今、使い道が少し違った方向で出費してしまった。

「ヤエおぼえとけよ！」

タクミが少し睨むだがそんなことを無視するヤエであった。

「私は、これからお店を出すんですけどタクミさんは、どうするんですか？」

ヤエが荷車を表に出してきてからタクミに聞く。

「まずは、観光だな、せつかく来たんだし。エリス行くぞ。」

「は、はい」

タクミとヤエは、いったん別れ、タクミ達は、ハイモ村を観光することにした。

第五話 「ぼちぼちな感じですね。」

タクミとエリスは、大路に出る。

昨日の夜も人が多かったのだが、朝も相変わらず人が多い。周りをよく見て歩かないとすぐぶつかりそうになるほどだ。

「タクミさんあれなんですか？」

エリスが指をさしたのは林檎飴を売っているお店だった。タクミもここに来る前の物と同じだったためにわかった。

「あれはな〜林檎飴だな。」

「林檎なんですね。」

エリスは、つばを飲み込んでいかにも食べたそうな雰囲気を作り出す。

タクミもさすがにそのことに気付き。

「わかった。買いに行こう。」

林檎飴の売っているお店に行こうとする。

「本当にいいんですか？」

「ああもちろん」

「本当の本当にいいんですね。」

エリスが何度も念入りに聞く。

「さあ、早く行こうぜ。」

タクミは、エリスがおろおろしていたため手を引っ張って林檎飴屋の前まで来る。

「おじさん、林檎飴一つ頂戴。」

いかにも屋台で売ってそうなおじさんが林檎飴を売っていた。

「はい、どうぞ」

お金を渡して林檎飴を貰いエリスに渡す。

「はい、これ」

エリスが、タクミから林檎飴を貰うと赤色で周りを砂糖でコーティングされた林檎をまじまじと見ている。

「これが…林檎飴…」

何度も周りを見ているエリスを見てタクミはほほえましい感じになる。

「早く食べるよエリス」

怒ったように言ったのだが語気は意外に優しい感じだった。

「食べますね…」

林檎飴をペロツと一口なめる。

「これおいしいですね！」

その後は、続けてペロペロとなめ始める。

エリス何度もおいしいおいしいと言っているのが面白い。

さたに、林檎飴を売っていたおじさんまで後ろから暖かい目線でエリスを見ていた。

あつという間に食べ終わりエリスは満足そうな顔をする。

「おいしかったか？」

「もちろんです！」

大きくうなづいた。

「それならよかった」

なんだかこつちまで満腹になったとタクミは思った。

二人は、大路の様々な出店を回って行った。

その一軒一軒でのエリスの反応が面白くタクミは何気にこの出店周りを楽しんだのだ。

一つずつ回って行くと途中で。

「タクミさん、あれって」

エリスの指さす方を見るとよく見慣れた出店があった。
その店人近づいていき。

ある人物に声をかける。

「よっ！調子はどうだ？ヤエ。」

タクミは、ある人物・ヤエに話しかける。

「ぼちぼちな感じですね。」

客は、5人いてそれぞれ長椅子に座ってみたらし団子を食べている。

「それならよかった」

タクミが出てこうとする。

「タクミさんにエリスちゃんここで一休みしてはどう？」

タクミの袖を引っ張る。

「でもな」

タクミが答えを出しかねているとヤエが袖をくいくいと引っ張っている。

「タクミさん、ここで一休みしましょうよ」

エリスまでもう一方の袖をくいくいと引っ張ってくる。

「ああー、わかったから二人とも離せって」

「まいど」

「やったー」

二人は別々の事を考えてタクミの袖から手を離す。

長椅子に二人は腰を掛けて

「みたらし団子二人前と緑茶を頂戴。」

「わかりました」

ヤエが、屋台の暖簾のれんをくぐって中に入っていく。

三、四分もしたらヤエが出てきて

「どうぞ、みたらし団子四人前と緑茶二人前です。」

お盆の上に二つの皿と湯気建っている湯呑茶碗を渡す。

「俺は、二人前と頼んだはずなんだが：またぼったくるつもりか！？」

「人聞きの悪い。誰がぼったくるんですか？サービスに決まってますよ！」

ヤエが悪びれもせず言う。

「はあ、人聞きの悪いのはどっちだよ：サービスならありがたくサービスされておくな。」

「ありがとうヤエちゃん」

タクミとエリスは、みたらし団子を食べて緑茶を飲む。

あつという間に団子がなくなり、緑茶をちまちま飲む。

ヤエがタクミの隣に座る。

「おいおい、いいのかよ。お店の方は？」

「今は、お客さんも少ないですし大丈夫ですって。」

先ほどより人は減り今は、二人しかいなかった。

「ヤエ、ここの村長の名前なんて言うんだ？」

「ここの村長ですか？確かゴンじいさんっていう名前で慕われいたはずですよ。」

ヤエが上を見つつタクミの質問に答える。

「ゴンじいねー。それでその村長さんはどこにいるんだ？」

「確か、小路地の奥の小さな家に住んでいるはずですよ。」

ヤエはタクミの質問に何も疑問を持たずに答える。

「村長がそんなところに住んでいるのか？」

タクミはもつとでかい所に住んでいるのかと思っていたのだがヤエが言ったのは小さな家と聞いて少し想像と違った。

「ゴンじいさんは、もう引退したとか言って政治関連にはまったく手を出していませんね。ただしアドバイスのことはしているらしいですけど。」

「なるほど…」

タクミの中でゴンじいを説得する方法を考えつつ緑茶を飲みほした。

「ごちそうさん。ヤエありがとうな。行こうぜエリス」

「どうも、股のお越しをお待ちしていま〜す」

ヤエが手を振りながら二人を見送った。

二人は、観光を終えてヤエと合流したのち昨日と同じ宿屋にとまった。

ただし、宿代は別々にした。

三人は寝ることにした。

一方別の場所では、ヴァルハラ宮殿で神族が動き出そうとしていた。

「千夏さんにブリュンヒルド。ご苦労様でした。」

オーデインの前に千夏とブリュンヒルドがいる。

「早速なんですか。部隊の増強をしたい。だから兵力をもっと増やしてほしい。」

千夏は、オーデインに向かって単刀直入に申し付ける。

「それなら、私も考えていましたし、いいと思います。なので兵力を増員しておきましょう。後、フレイヤもあなたのもとにつけましょう。」

オーデインがそういうと、甲冑に包まれた金髪の長い髪の人が出てくる。

「ははっ、かしこまりました。オーデイン様。」

フレイヤが畏まるとオーデインが頷く。

「千夏さん^{あと}後、魔王軍討伐の他に山賊の排除もお願いしたいの。」

「山賊のですか？」

千夏が首をかしげるとオーデインが言葉をつづける。

「最近、人族魔族の両方が山賊行為をしている。だからあなたたちに討伐を依頼したい、いいかしら？」

「わかりましたよ。」

「ははっ」

「了解しました」

三人が異なる返事をして部屋を後にするのであった。

第六話 「俺たちは、この村を買いに来た」

翌朝、二人は村長のゴンじいの家に行くことにする。
ヤエは今日も大路に店をかまえるために別々になる。

タクミとエリスは、薄暗い小さな路地を通る。

そこは、人の居住区域で洗濯物が干されていたりしている。
しかし、太陽が届いていない。

タクミとエリスは、薄暗い路地を抜けると少し光が入ってくる開けた場所があった。

「確か…ここを右にいったところにあつたはず」

タクミは、ヤエからもらった地図を見ながら進んでいく。

進んでいくと少しずつ家の広さがでかくなってきた。

「ここか…」

地図で赤丸が記されている場所に到着した。

家を見てみると一戸建てなのだが、周り比べると極端に小さい青色の屋根に周りは白色で塗られている。

「ここが、ゴンじいさんが住んでいる家ですか…」

エリスは、顔を上に向けながら家を眺めている。

「エリス、ポケットとせずに入ろぞ！」

「誰がポケットとしているんですか！誰が！」

エリスが抗議しているがタクミは無視して家のドアを二、三回叩く。

ドンドン。ドンドン。

タクミは、ドアを叩いても返事がないため、足を思いっきりあげて蹴ろうとする。

ガチャ

「どこのどいつが人の家のドアを壊し路る奴は！」

白髪でひげを長く生やしたおじいさんが出てきた。

「あの、私たち村長さんに会いに来たんです。」

エリスがタクミの一步前に出てきて白髪のおじいさんに話しかける。

「わしが村長だが何か用でもあるのか？」

村長がいきなり出てきたことに驚いたのだがエリスは立ち直り。

「村長さんでしたか。お話があつて会いに来ました。」

「何だ？また何かの押し売りでもする気か！そんなのたりとるからいらんわ！帰れ！」

ゴンじいが手でシッシとする。

「俺たちは、この村を貰いに来た」

タクミが今まで黙っていたのだが言った。

そしたら、ゴンじいの目が少し変わる。

「この村を貰いに来たのか。どこのどいつがぼざく！」

ゴンじいが今までの語気とは、うって変わって威嚇するように強く言う。

「俺たちは、魔王軍だ。噂くらいは知ってるだろ。人族の部隊を破つたってことぐらいは？」

挑発気味にタクミが話す。

「あの魔王軍か…何でもものすごい力を持って魔王が再臨したとかそんな噂が流れておるの。しかし、お主たちが魔王軍だという証拠はあるのか？」

ゴンじいが顎に手を置きさすりながらタクミに聞く。

「証拠なんてないさ。あるのは事実のみだ。噂がどうだか知らないが。俺たちは村を取りに来たんだ。そのためにわざわざこつちから話しかけてきてやったんだ。」

「ちよつとタクミさん！」

エリスが慌てふためく。

「ほっほっ、若造に何ができるというんだ！？突然この村を取りに来たと言ってもただのアホが叫んでいる事と変わりないわい！」
ゴンじいの口から唾が飛ぶ。

「若造が考えた結果が話し合いだ。村長さんに選ぶ選択肢は二つだ！一つは、このまま話し合いで魔王軍に引き渡してきれいなままこの場所が残るのか。戦ってこの村が焼け野原になるのかだ。」

「若造と認めたうえで、その選択肢を迫ってくるか：お前とは話してみる価値があるかもしれんの。入って茶でも飲んでいけ。」

ゴンじいが扉を開けたまま中に入って行く。

「それじゃあ、エリス。茶でも飲んでいくか」

タクミも開きっぱなしの扉の奥へと進んでいく。

「えっ、えっ。ちよつとタクミさん！」

エリスも慌てて中に入り扉を閉めてタクミの後に続く。

中は、古ぼけた外装に古い机といすが四つあった。

そのうちの一つにゴンじいは座っている。

タクミとエリスも椅子に腰を掛ける。

「爺さんが誰かを招くなんて珍しいこともあるもんだい。」

奥から腰が曲がっているお婆さんが出てくる。

その手には、お盆と三つのお茶を持って出てくる。

「お前は、あっちに行っておれ。邪魔だ」

ゴンじいが言うと、お婆さんはお茶を置いて

「ゆっくりしていつてくださいね。」

優しい一言を述べて奥に下がって行った。

「それは、詳しく聞こうとしようか。ほれいつて見る。」

お茶をすする。

「俺たちは、魔王の旧領土を取り戻すために戦っている。ただそれだけだ。」

「何で、この村が最初なのだ。」

「そりゃあ、大は小を兼ねるって言うだろ」

タクミとゴンじいの会話をエリスは真剣剣に聞いている。

「大は小を兼ねるか？それで、お前の望みはなんなんだ。魔族だけの土地でも作るのか？」

「いや、魔族と人族そして神族の世界を作るために戦うんだ！」

タクミはゴンじいの質問にすぐに答える。

「共存の道を望むか。しかし、今でも共存できていない者どもが多いぞ。この村だって元々魔族と共存してたがために追い出されたものも少なくはない。」

「それでも、その人たちも生きようと必死になってこの村が出来たんだろ。それならまた手を取り合えるはずだろ。魔族と人族が。」

タクミが必死に説得しているのだがゴンじいはなかなか納得しない。

「この村が出来てもう二年は過ぎようとする…それは、魔王が死んだ時期とちょうど重なるのだ。その意味が分かるか？しょせん魔王なしには魔族は成り立たないのだ。」

「……というか…エリス二年も逃げ回ってたのか？」

「そうです。」

タクミは数週間だと思っていたのだが二年もたっていたのに驚きを隠せないでいた。

「その間に、あなたを召喚するための材料を集めてたんです。」
「なるほどな」

二人は、小声で話し合った。

そして、ゴンじいの方に向き直り。

「それは、魔王と言う象徴が死んだからだ。まだ、基盤が盤石じゃなかったから招いた結果なんだから。今回は違うぞ。何だって俺は死なないからな。それならいいだろ」

タクミが胸を張りながらゴンじいの問いに答える。

「それは、面白い。しかし皆がどうやってたら納得するのじゃ。」

「そんなのは、今から考えて行けばいい。この先長く住んでいくのだから。時には喧嘩もしてもいいと思う。そうやって手を取り合って仲良くなれば今まで以上に良いものになるはずだから。」

「ほおー。なぜに闘う決意をした。」

タクミは答えようとしたのだがエリスが真っ先にこたえる。

「それは…みんなが平等で楽しく暮らせる世界を作るためです!!」

「平等で楽しくか…しかし、今だって何回も戦いは起きている。それこそ人族同士。魔族同士だって。」

ゴンじいがエリスの発言を否定的に言う。

エリスが胸の内に貯めた思いをぶちまけ。

「力は、力です。でも、武器を手取るのではなくて、隣の人の手を取るんです。力の使い方は、時には害も及ぼすこともあります。その害をどうやって善にするのかが大切なんです！害は別に悪いことでもない。本当に悪いことは、善にしようと努力しないことです！！」

「善にするために努力をする…だから、お前さんは、戦いあって差別している害を、戦うことによって善にするつもりか？たとえ、どれだけの血が流れても。」

エリスが下を見たがすぐに顔を上げて

「もちろんです。たとえどれだけの血が流れても、道を進んでいくしかないんです。でも、やっぱり…血はあまり見たくないの、説得と言う方法を取ったんです。」

「ほぉ」

ゴンじい考えるそぶりを見せる。

タクミは、エリスの思いをただ黙って聞いていた。

第七話 「何で、sonだけで納得が出来たんだ？」

「二人とも面白い…しかも、すっかりとした意志もあつたからのう。さてどうしようか…」

独り言のようにぶつぶつと呟いている。

「じいさんやゝ協力してやってもいいかもしれませんよ」

突然茶を持ってきたお婆さんが現れる。

「しかしのゝ」

「じいさんがここまで悩むなんて結婚してから見たこともありませんからねゝ何か面白いことでも見つけたんでしょ」

二人ののんびりした会話を聞いている二人。

「この二人にかけてみるのも面白いかもしれんのゝ。ばあさんいいかの？」

「何も口出しはしませんよ」

お婆さんはまた奥に戻って行った。

「よし、お前らに協力してやろう。」

エリスとタクミの方を見て言う。

「本当ですか！！」

エリスが立ち上がり手を机に置く。

「本当^{ほんと}じゃわい。お前たちにかけてみようと思つからのゝフオフオフオゝゝ」

エリスがタクミの手を握り。

「タクミさんやりましたね！」

エリスがとても喜んでいる。

「ああ、そうだな。」

タクミは、エリスに手を握られてぶんぶんさせられているために動けないでいる。

「それで、村長さんこれからどうするんですか？」

エリスがさっそく本題を聞く。

「今の時間なら…」

ゴンじいは、古ぼけた時計を見ながら考えて

「よし、ついてこい。ばあさん！ちよつと出かけてくる。」

「いつてらっしゃい。」

ゴンじいが椅子から立ち上がり玄関へと向かう。

それを追って二人も駆け足で追いかける。

「どこにいくんでしょう？」

「さあな？」

ゴンじいが扉開けて出ていく。

二人もそれについていく。

ゴンじいさんの歩く速度はなかなか早く。

二人は駆け足気味な感じで追いかけて行った。

小さい道からいろいろな曲がり角をまがって大きな建物の前に着く。

「ここじゃわい。」ゴンじいは、二人と歩幅を合わせて門をくぐる
うとする。

「これは、村長様ですか。いかがご用事で？」

門を守っている衛兵に敬礼されて質問される。

「重大な用事だ。この封たりもおしても構わんな？」

「はい！どうぞ！」

衛兵は、そのまま門の前まで戻り通常通りに周りを見渡している。

でかい門を開けて中に入っていく。

二人も中に入って行くと赤いじゅうたんに豪華なシャンデリアスが

つるしてあつた。

「わあーすごい…」

エリスが上を見ながら口をポカッと開けている。

「ほれ、二人ともついてこい。」

「ゴンじいは、さつさと前に歩き出す。」

らせん状の階段を一段一段登って行き、廊下に出ると衛兵が二人いた。

「何者だ！」

一人の衛兵が大きな声で威嚇する。

「わしは、村長だ。お前たちの目はふしあなか！」

「これは、失礼しました。」

ゴンじいは、カツを入れると衛兵は慌てて誤る。

「それと後ろから付いて来ている二人もおせよ」

「はい！！」

二人の衛兵は、同時に敬礼をする。

村長さんってすごいですね。」

「人は見かけによらないな」

二人は、ゴンじいの後ろについてきながらある部屋の扉の前に立つ。

「それでは、入ろうか」

ゴンじいがさういうと、扉が一気に開く。

中には、若いガタイのいい人から年を取った老人まで様々な人が丸いテーブルの前に座っている。

ゴンじいが入ると一斉にそちらの方に視線が集まる。

「これは、村長。今日はどういったご案件で？」

一番奥にいたメガネをかけた中年の女性が突然現れた村長に驚きながらも冷静に聞く。

周りに人も自然と村長の発言を聞こうと耳を傾ける。

「今回の案件は、ちまたに噂が流れている魔王軍に協力するといことだ。」

ゴンじいが前置きもなく言うとき周りが騒然とする。

隣同士で話し合っている人の姿も見受けられる。

一番奥にいるメガネをかけた女性だけが机に手を置き黙って考えている。

数分沈黙が流れた後でメガネをかけた女性が口を開いた。

「それは、どういうことなのでしょう？」

周りの人たちもその言葉の返事を聞くために静かになり視線がもう一度村長に集まる。

エリスとタクミは、ゴンじいの後ろで固まっていた。

「それは、この二人の若者にかけてみたいと思ったからじゃ。この二人は、魔族と人族の共存を望んでいるのじゃ、だからわしも協力したいと思っただけじゃ。わかったか？カリサ」

「はい分かりました。」

メガネをかけた女性：カリサが頷く。

「村長がそこまでいうのなら私は賛成しましょう。」

カリサの言葉に周りがもう一度騒然となる。

タクミとエリスも驚いている。

カリサの決断がとっても早かったからだ。

「カリサは、賛成してくれるか。他のものはどうだ？」

ゴンじいがうんうんと首を振りながら他の人たちになげかける。

「それなら、俺もいいと思う。」

「あたいもそれでいい。」

「そうだな。カリサ姉さんとゴンじいさんが言うなら賛成だ。」
周りに賛成の嵐が巻き起こる。

「でも、民衆に一応は聞いておかないといけないわね。すぐに手配させないと。」

カリサが、素早く動き出して、部屋に人を呼びその人に何か話すとその人は、すぐに部屋を出ていく。

ここで、初めてタクミが口を開く。

「何で、sonだけで納得が出来たんだ？」

タクミにとってはゴンじいの一言で全ての議論が一瞬で片付いてしまったことに驚き。

何の疑いも抱いていないことを疑問に思った。

「それは、ゴンじいの事を信頼しているからよ。この村を復興させたのもゴンじいのおかげなの」

カリサが何の曇りのない声で言いきる。

「この村は、魔王と神族との戦争で二回焼け野原になっているの。でも二回ともゴンじいのおかげで立ち直り。今ではここまで大きくなったの。だから私たちはゴンじいを信じているの。」

カリサが言葉をつなぐと周りの人たちも頷く。

「信頼第一だな。」

タクミが感心して、エリスが何も言わないまま会議は進んでいき。村長の一言で次々と決まって行き。

明日には、民衆の返事を聞いたのちに決定するとゴンじいが言ったために二人は、宿に戻る。

次の日の昼過ぎには、賛成で民衆がまとまった。
全てゴンじいの一言があつたからなのだ。

ついに魔王軍は、ハイモ村を手に入れる事が出来た。

大きな一歩を進む事が出来たのだ。

第八話 「またいつか会えるさ」

住民の投票により可決されたときにタクミとエリスは、ゴンじいと一緒にいた。

「どうじゃ！わしの力は！」

ゴンじいが腰を曲げて高笑いしている。

「さすがです。ゴンじいさん」

エリスはいつの間にもやらゴンじいと仲良くなっていて、ゴンじいは孫のようにエリスと話をしている。

タクミにだけは冷たかった。

「ここまで喜ぶ爺さんを久しぶりに見るわい。」

お婆さんもその時に近くにいてゴンじいの姿を懐かしそうな目線で見ている。

「ところで、エリスにタクミは、これからどうするのじゃ？」

「これから、魔王軍のいる森まで戻って話をしてから魔族を連れてこようと思ってる。」

ゴンじいの問いにタクミが答える。

「それなら、他の村にもはなしにいかないとやせんとな」

「確かにここだけではだめだろうな。」

ゴンじいが後ろに会った棚から地図をひっぱり出してきて広げる。

「ここがヘイモ村じゃ、そしてここに青い点がうたれているのが数百人規模で、赤が数十人規模の村じゃ」

指をさしながら説明している。

「すごいな……こんな地図があるなんてな」

「わしが作らせたんじゃないぞ。わしが」

地図を少し上にあげて叩きながら自慢をするが埃が舞う。

「それでじゃ、どうするのだ？」

「そりゃ、全て説得に行くに決まってるだろ。」

タクミが間髪入れずに言う。

「そかそか、それならわしが手紙を書いてやるからそれを持っていけそうすれば納得してくれる村も多くあるだろう。」

「ありがとうございます。」

エリスが地図を手に持つ。

「それなら俺たちは一度、魔王軍の所に戻るから手紙をよろしく。」

「わかった。明日までに何とかしよう」

紙と筆を出してくる。

「それなら明日またじいさんの家まで行くな」

「まっとするは」

ゴンじいと別れて扉から出ようとしたとき

「ありがとうね。またいつでもおいでよ」

お婆さんがにつこりと笑いかけてきた。

「もちろん！」

「もちろんです！」

二人は返事をして建物から出た。

「これからどうします」

エリスが歩こうとしているタクミに聞く。

「そうだなー」

タクミ達の上にある太陽はまだ高い。

「どうせだからヤエの所にも行くか？」

タクミが振り返りエリスに聞く。

「いいですね。」

エリスも頷き歩幅を合わせて大路へと向かった。

「どこにあるかな」

タクミが周りを見渡している

「あれじゃないですか？」

エリスが指をさす。

そこには、ヤエの姿が確認できた。

「いたいた。」

タクミとエリスは、ヤエの所まで歩いていき。

「ヤエ元気か」

タクミが声をかけるとお盆の上にみたらし団子を持ったヤエが振り向き

「タクミさんにエリスちゃんいらっしやい！」

「第一声がそれかよ……」

タクミが長椅子に座る。

「まあいいじゃないですか」

エリスも長椅子に座る。

「注文は何にします？」

「それならみたらし団子二人前に緑茶を二つな」

タクミがすぐに答える

「わかりました」

ヤエが、店の中に入って行く。

「タクミさん、ヤエちゃんには話さないんですか？」

ヤエがいなくなったのを見てエリスがタクミに聞く。

「言わない方がいいだろう。それにこれから戻るんだからお別れだな。」

エリスは、残念な顔をする。

「せっかく仲良くなれたのに別れなんですネ。」

「またいつか会えるさ」

「そうですね…」

ヤエがお盆を持ってくるとうエリスの顔が少し明るくなる。

「はい、おまたせ。」

長椅子にお盆を置く。

「ゆっくりしてってくださいね」

ヤエがすぐに別の所に行く。

「今日は忙しそうだな。」

周りを見ると長椅子は人でいっぱい、歩きながら食べる人などもみたらし団子を買って居る為ヤエは大忙しだった。

「大変そうですね。ヤエちゃん」

「そうだな」

エリスは心配そうに八重を見ながらみたらし団子を食べ。

タクミは、客になりきって茶をすすっている。

数分で食べ終わってしまった。

「何回食べても飽きないな。」

タクミは、何回もみたらし団子食べているのだが意外と飽きはしなかった。

「確かに何個でも食べれますね。」

エリスも頷きながら同調した。

「ちょっと手伝うか？」

「いいですね」

タクミとエリスが同時に頷く。

「おい、ヤエ。手伝うよ！」

タクミとエリスがヤエの前まで来る。

「本当！？助かる！それならエリスちゃんは注文を受けるのをやって。タクミさんは会計やってください！」

「了解」

「わかった」

二人はエプロンを借りてそれを付けてお店の手伝いをした。

あつという間に時間は過ぎていき気が付くと太陽が傾きかけ真っ赤な空を作り出していた。

「ありがとう」

ヤエは店じまいをして荷車へと変えた。

「どういたしまして」

「それじゃあ、宿に行くか」

タクミは荷車を押して宿に戻る。

夕食を食べて一夜明ける。

タクミはヤエにお別れをしようと探していると宿の女将さんと話しているヤエを見つけた。

「ヤエいたいた」

タクミの声に気付くとヤエと女将さんは話すのを終えてヤエがこちらに来た。

「ヤエ女将さんとの話よかったのか？」

「このあたりのむらについてきいたんです。」

ヤエがタクミに地図を見せる。

「それで何か御用ですか？こんな朝早くどうしたんですか…まさか

朝這い!？」

ヤエは、手を頬に当てる。

「いったいどうしたら、そういう考えになるんだ?しかも、夜這いじゃなく朝這いってどういうことだよ!」

「冗談ですよ冗談」

ヤエが今度は手をひらひらさせる。

「俺たちは今日この村から旅立つから別れのあいさつでもしようと思っただけ。」

「そうなんです。エリスちゃんとお別れはさみしいですけど。頑張ってください」

ヤエが少し残念そうな顔をする。

「ああ」

タクミとヤエが話しているとエリスがこっちにくる。

「タクミさん探してたんですよ!」

「すまん、すまん。俺もヤエを探してたんだ」

その一言で状況がわかったエリスはヤエの方を向き。

「お別れですね。元気にしてくださいね。」

ヤエとエリスは手を握りしめあう。

「エリスちゃんこそ、元気だね。またどこかで会おうね」

「もちろんです!」

たった二言三言でお別れの話は終わったのだがそれは二人にとっては大きなものになったのだ。

「それじゃあな、ヤエ!エリス行くぞ」

「ヤエちゃん!またね!」

「タクミさんにエリスちゃんもまた会いましょう!」

朝日がの見え始めたところにタクミとエリスが宿を出てヤエと別れたのだ。

ゴンじいから手紙をもらうために家へと向かう。

「じいさんいるかー！」

ゴンじいの家の前まで来て玄関を叩く。

「いったい何時じやと思つとるか！」

ゴンじいが扉を思いつきり開ける。

「じいさん。準備できてるか？」

「ゴンじいさんおはようございます。」

ゴンじいが奥に振り向き。

「当然できておるわい。待っておれ」

そう言つて中に入つて行つた。

お婆さんが奥の部屋から入れ違いで出てくる。

「じいさん、昨日は張り切つて手紙を書いておつたわ。見てるだけで面白かつたの」

婆さんがそういうとゴンじいが数十枚の手紙の束を手にとって戻ってくる。

「うるさいこと言つな」

「はいはい」

また婆さんはすぐに奥に入つて行つた。

「これじゃ」

「すごい数だな」

手に渡された手紙の束はかなりの重さがあった。

「それで大丈夫じゃろう。あとは頑張つてくれ。」

「ありがとうなじいさん」

「ありがとうございますゴンじいさん」

二人は挨拶をした後家を離れて行つた。

後ろからはゴンじいの笑い声が小さく聞こえた。

そうしてタクミとエリスはヘイモ村から一路ダーインウッドに戻
のだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7366x/>

魔王と勇者のタクティクス

2011年11月23日17時55分発行